



# RISING

## mini

Vol.08

オリジナル・二次創作をひとまとめにした増刊誌 第八号登場!!

Creat.inc



目次

アメノトリフネ殺神事件【試読版】……………03  
黒板厨ゆうなマギカ：結……………22  
pokemon XY 第十三話……………25  
ぼくらはポケキョウ戦士 第一部完結編……………28  
奴隷少女の勇者道……………34  
【新連載】人魚姫の遺した花　〜 柊木さんシリーズ〜……………68  
パラドックスよ、こんにちは。……………76  
次号予告……………82

※「ネクストワールド 名のなき世界3」「ロジカリスト（白）」は休載です。

全83ページ

## アメノトリフネ殺神事件

1

冠天堂のゆるふわロールケーキは小豆の甘露煮を生クリームに混ぜ込ませた特製クリームの中にフルーツをたっぷりとくわえてそれをスポンジケーキに塗り、渦巻き状に巻いた一品である。食べた瞬間、口の中にフルーツの爽やかな香りが広がり、まるでフルーツそのものを食べているような錯覚に誘われる一品だ。

しかしながら、それよりも美味しいメニューが存在する。

冠天堂フルーツパーラーでしか食べることが出来ないフルーツパフェだ。

もともとゆるふわロールケーキはフルーツパフェを再現するために開発されたとも言われて

いるが、しかし実際にフルーツパフェとゆるふわロールケーキを食べ比べた人間から言わせてみればそれはまったくの間違いだといえる。

理由は冠天堂の店員が行う、ひと工夫だ。

フルーツパフェにはフルーツがたっぷり入っている。そのため、入っている小豆甘露煮ロールが水気を吸ってしまった、せっかくのふわふわの食感が台無しになってしまうのだ。

それを防ぐために、フルーツパフェに含まれる小豆甘露煮ロールは表面を少し炙っている。そのためか、フルーツの上に置かれていても水分を吸うことなく、外はカリカリ中はふわふわの食感が味わえるというのだ。

しかしながらこれを食べるためには、日本に三店舗しかない『冠天堂フルーツパーラー』へと出向かなくてはならない。しかしその座席は少なく、どの店舗もカウンター十二つ三つのテーブルしかない。どのフルーツパーラーにいっ

でもこれは変わらないし、そういう営業方針なのだから仕方ない。

そんな冠天堂フルーツパーラー江の島店は海岸沿いにある。連日多くの観光客が訪れ、フルーツパフェを平らげていく。

ゆるふわロールケーキはよく『神様も愛するロールケーキ』と呼ばれる。眉唾モノじゃないかと言われるが、これは甘いもの好きなカミサマが店主の前に現れ一緒に商品を開発したという伝説みたいなお話しから来ている。

そして、その店内。  
カミサマとカラスがフルーツパフェを食べていた。

カミサマとカラス——といっても、その姿は人間そのもので、カラスに至っては翼を隠しているため、正体を掴むことは容易ではない。

「これすっごい美味しいですね!」

「だろう? いやー、今日は現世に出張でほん

とうよかった。食べる時間もあつたし」

カミサマの方は、そう言つて微笑む。

カミサマの名前はスサノオといい、カラスはヤタガラスという。

いずれも古く of 書物に名前が記されている、伝説的存在である。

さて、そんなカミサマとカラスがどうしてこうしてこんな場所に来ているのだろうか?

それはロールケーキを食べているスサノオ自身に語ってもらうこととしよう。

「何を言っているんだ。別にそんなものどうだっていいだろ、食べたいものがあるからここに來ている。そして、その食べたいものを食べている。毎回思うけれど、これは人間には勿体無いよ。神界に支店を作るべきだと毎回店主に言っているけれど、悪戯だと思われてしまっている。残念なことだよなあ」

因みにここまで百三十六文字。ぎりぎり一ツ

イート分である。

「ところで、ヤタガラス。ここを集合場所を選ばなかった理由を聞かせてもらおうか」

「当たり前じゃない。ここは神界じゃない、人間界なのよ。人間界で集合するなんて無理でしょう？。なのに、どうしてわざわざ人間界まで」

「このロールケーキ、美味いだろう？」

「ええ、そりゃあまあ」

「それが理由だ」

「理由になつてない！」

「そもそも俺に集合場所を選ばせようというのが大きな間違いだということに気付かなかったのか。俺は甘党だ。前もあつたとおり、ゆるふわロールケーキが食べたくてちよくちよく人間界に降りるくらい、甘党だよ。それはお前も知ってるだろう？。ゆるふわロールケーキはフルーツ、生クリーム、生地、凡てがいいバランスにマッチングしている。最強のケーキだと言

つてもいい。これを主食にしてもいいと思つてくるくらいにね」

「それを主食にしたら流石にカミサマとはいえ、身体がおかしくなりますよ……？」

「なつても構わない。それで死ぬるなら本望」

「駄目だコイツ早く何とかしないと」

閑話休題。

「そんなことより、どうして私があなをオオヤシマに呼びつけたか、解りますか？」

「俺に惚れた？」

「クシナダヒメに殺されるわ」

「やれやれ、と言つてヤタガラスは首を振つた。

「そんなことではない。そんなことじゃないんですよ、それ以上に重大で重要で嚴重なことがあるんです」

「そこまで言葉を重ねるくらいに、か？」

「そこまで来ればサノオもケーキを食べる手を止めて、すっかりヤタガラスの話聞いてい

た。

「で……何だ。何かあるんだ？」

「国譲り、って知っていますよね」

「国譲り、か」

ヤタガラスの言葉を反芻するスサノオ。

『国譲り』とは、またの名を葦原中国平定(あしはらのなかつくにへいてい)という、天津神が国津神から葦原中国を譲ってもらったことを言う。因みに葦原中国とは、現在の日本国土のことを指す。即ち、日本国土が日本として成立するために、重要な事柄なのだが――。

「それがどうかしたのか？」

「国譲りの三柱が争っているのですよ。理由は言う必要も無いくらいくだらないものですが」

「ふむ。三柱というと、タケミカツチ、フツヌシ、それに……」

「アメノトリフネ、ですね」

スサノオの言葉にヤタガラスが補足する。

「まさかその仲立ちをしろ、なんて言わないよな？ 仲良くするために協力しろ……なんて」

「その通りです。まさにその通りですよ」

「最低過ぎるだろ！ あの三柱の戦いに望んで巻き込まれる。お前はそう言っているのと同等的だぞ。」

「ええ、そうですよ？」

ヤタガラスが、自分自身が言った言葉を理解しているか、それともしていないか、スサノオには解らなかつた。

小さく溜息を吐いて、スサノオは続ける。

「それで……。俺はどうすればいい？ その三柱の争いを仲裁するために」

「それは簡単です。既にある場所にメンバーを集まっていますから、その場を取り仕切ってもらいたいんです」

「……因みにイザナギはどうした？」

「厄介事には手をつっこみたくない、との一点

張りです。おかげで私がこの事件の全責任を負うことになりました。もし失敗したら、養つてくださいね?」

「そんなこと言われてもなあ……」

頭を搔いて、スサノ才は言った。

「そんな簡単に済む話じゃないですよ。それが、オオヤシマがあなたに依頼した理由でもあります」

「依頼? やけに仰々しい言い方をするもんだな。いったい、何があつたつて言うんだ?」

「単刀直入に言いますと、アメノトリフネが監禁されている、ということですよ」

「……監禁、だど? あいつは確か船の神様だろ。どうしてそんなことをする。監禁して利益でもあるのか?」

「アメノトリフネを監禁した犯人……この場合は『犯神』とでも言えбайいのでしょうか。それは把握しています」

「だったら言えよ、今すぐ」

「フツヌシです」

「それつてどういうことだよ。フツヌシがアメノトリフネを監禁している……?」

「それ以上でもそれ以下でもありません。それが真実です」

「真実、と言つたつてなあ……。やはり信じたくないものだぞ、そういうのは。考えても見ろよ、俺はフツヌシとは古くからの知り合いだ。あいつのことは誰よりも知つているつもりでもある。そんなフツヌシがアメノトリフネを監禁している、だつて? それを言われて俺が信じないわけがないだろう……」

「そう言うと思つて、今からその証拠をあなたに見せようと思つています」

そう言つてヤタガラスは立ち上がった。不審に思つたスサノ才は首を傾げる。

「証拠つて……無いじゃないか」

「なにも『私が証拠を持つている』なんて一言も言っていないですよ。今からその証拠がある場所へ向かうんです」

「……まさか」

「そのままかです。廃村となつてしまった村の奥深くに神社があるらしいのですが、そこにアミノトリフネは居るらしいのです。そこへ向かいます。きっとタケミカツチも居るはずですから」

2

廃村となつた村——名前を聞いただけでは解らなかつたが——そこへスサノオとヤタガラスは足を踏み入れた。

「それにしても酷い畦道だな……。ここつて、もう相当昔に廃村になつてしまつた、つてことか？」

「ええ。確か平成六年ですから、もう二十年近いと思います。原因は少子高齢化などによる子供の減少と若者が地方ではなく都会へと出て行つたことによるものですね」

「ふうん……。あと一つ質問してもいいか？」

「何ですか？」

「お前が持つている、その大きな物は何だ？」

それを聞いてヤタガラスは肩を震わせた。ヤタガラスが持つているもの、それは白い布に覆われた何かであつた。大きさからして三メートル程ある。非常に大きな代物だ。質量もそれなりにあるようで、スサノオが何度も持つとうかと思つたが拒否されている。

「これですか？　これは……。えーと……。必要なものです」

「どうして白い布で隠す必要があるんだよ？　何か理由でもあるのか？」

「それは……。えーと……。あつ！　見てください」



い！ あそこが神社ですよ！」

見事に話を逸らしたヤタガラス。そしてスサノオもそれを聞いて彼女が指差す方向を見た。

——それは神社というにはとても異様な場所であった。神社の鳥居を潜ると参道をはさんで両側に置かれているのは立方体の物体だった。

「……サイコロ、か？」

「恐らくそうだと思います。昔は何か乗っかっていたのでしょうけれど、今は少なくともそれは見当たりません。結局、そんなものなど無かったのではないかという通説もあるくらいですが、だとしてもこのサイコロめいた物体は気になるんですよえ……。どうしてこんなところにあるのかというのもあるんですけど、それ以上にこれを制作した意義ですよ。しかしそれを語ることできる神はこの場において存在していませんがね……」

「どうということだ？ この神はアメノトリフ

ネでもフツヌシでも無いのか？」

「ええ。少なくともそれにタケミカツチを加えた、三柱ではないことは確認済みです」

「なら、誰が……」

「今はそれを考えるべきではないでしょう。少なくとも今はこの状況をどうにかせねばなりません」

「あら……カミサマでしょうか？」

声が聞こえた。

それを聞いて、スサノオは嫌な汗をかいた。まさかこんな寂れた場所に人間——しかも、自分たちをカミだと視認出来る人間だ——がいるなど思わなかったのだ。

そこに居たのは二人の巫女だった。姿かたちが全く一緒の。一卵性双生児とはまさにこのことを言うのだろうか。或いは鏡写しの状態を言えばいいのだろうか。どちらにしろ、あまりにもそっくりすぎて気持ち悪いくらいだ。

「……巫女、か？」

スサノオは訊ねる。

巫女の双子は同じタイミングで頭を下げる。

「私は三途川伊織といひます。私は姉です」

箒を持ってゐる三途川伊織が言った。

「そして私は妹の三途川香織といひます」

塵取を持つ三途川香織は空いてゐる左手を舉

げて言った。

「双子……つてことか？」

「まあ、そういうことになりますね」

箒を持つてゐる方——即ち三途川伊織が答へる。

三途川香織は塵取を地面に置いて、袴についた埃を叩く。

「……ところで、何の御用でしょうか？」

「御用……というか、ここにフツヌシ、或いは

タケミカツチは居ないか？ アメノトリフネでもないぞ」

「その三柱、何れもここに居ますが……」

それを聞いて、スサノオは溜息を吐く。

「それじゃ、先ずはフツヌシの場所へ案内してくれないか」

三途川伊織は頷くと、箒を三途川香織へと手渡し、境内の奥へと歩いていく。どうやら、スサノオたちを案内するようでもあった。

それを見てスサノオとヤタガラスは後を追つた。

「アメノトリフネを解放しろ？ そんなことして解放する悪役がどこにいるんだよ」

「自分が悪役という認識はしているんだな、フツヌシ」

スサノオとヤタガラスはフツヌシの居る場所へとやってきた。とは言つても境内の中にある

社を入つてすぐの部屋だ。まるでその奥の部屋に誰も入れさせないようにしている、そんな雰囲気を感じる。

ヤタガラスは溜息を吐き、話を始める。

「フツヌシノカミ、あなたはやつてはいけないことをしてしまいました。カミの私的監禁です。カミを封じていいのはその力が世界に悪影響を与える場合のみ。しかしアメノトリフネは世界に悪影響を及ぼすことのない存在です。にもかかわらずあなたはアメノトリフネを監禁した。これはやつてはいけないことなのですよ」

「黙れ、烏如きが。カミよりもグレードをひとつ下げた神使がカミにそんな口を聞くのか」

フツヌシの目つきはとても悪かった。身長は特に高くもなく低くもなく、しかしその目つきが存在感を示している。少年のような容姿だが、その陰険な目つきは少年らしさを裏切っていると言つてもいい。

とは言つても彼はカミだ。人間ではない。だから人間でいうところの少年めいた容姿であつたとしても、カミの年齢概念は人間における年齢概念とは大きく異なる。

「だから、私はオオヤシマの代表としてここに来ているわけで」

「オオヤシマというのはこういう神使まで扱っているのか。それを聞いただけで、それを見ただけで虫唾が走るな。いったいどういう教育をしているのか、イザナミとイザナギに会つてみたいくらいだ」

「……では、アメノトリフネを解放していただけますね？」

「いいや、それは嫌だね」

フツヌシは首を横に振る。

「何故ですか」

ヤタガラスは訊ねる。

フツヌシはそれに対して、首を傾げる。

「何故か、つて。それは簡単なことだ。俺はアメノトリフネのことが好きだからだよ。大切なカミを、大切な存在を、大切にするために、閉じ込めようと思うのは道理ではないか？」

道理。

確かに、考え方によってはそうなのかもしれない。

しかしそれは、道理は道理でも、歪んだ道理であることは、スサノオもヤタガラスも理解していた。

「道理、果たしてそうなのかね。それはただ言い訳を正当化するだけなのでは」

「スサノオ。君ならば理解してくれるだろうか？君はクシナダヒメと結ばれたと聞いた。君だつて大切な存在が居る。大切な存在が居るならば！ それを守ろうと思うのは道理。そうだとは思わないか？」

「……確かに俺にも大切な存在はいるよ。でも

な、その大切な存在はそんなことをしないと守ることは出来ないのか？ 少しばかり、やりすぎだとは思わないのかよ」

「やはり君も理解してはくれないか、スサノオ。君くらいは理解してくれると思つたよ。でも俺は戦つて正当化するつもりはない。ならばずっとここに居るよ。何千回でも何万回もやってきても、俺はアメノトリフネを解放することはしない」

「……予想はしていましたが、これは骨が折れますね」

「ああ……。しかしあいつがそこまであいう性格だつたとはなあ」

ヤタガラスとスサノオはそう言いながら境内にあるベンチに腰掛けていた。

「やはり、駄目でしたか……？」

やつて来たのは三途川伊織だった。

三途川伊織はトレイを持っていた。トレイの上には二つグラスが乗っかっている。そのグラスには氷水が並々入っていた。

「きつとお疲れだと思いましたが……」

そう言つて、三途川伊織は二柱にグラスを差し出した。

スサノオは頭を下げ、水を一口。

直ぐに冷たい水が喉を通つていくのを感じる。

「ああ……、冷たいなあ。ありがとう、助かったよ」

「冷たいね……。それにしても、フツヌシ、どうしましょうか？」

「それについては僕も考えていたところなのだけれどね」

その声を聞いてスサノオは上を向く。

そこに立っていたのは鹿を連れた少年だった。Tシャツにジーパン、チュッパチャップスを口

の中に放り込んでいる。さらに首には勾玉をかけていた。

それを確認して、スサノオはそれが何者であるのか理解した。

「何だ、タケミカツチか……。相変わらず現実めいた格好をしている」

タケミカツチはチュッパチャップスを取り出して、

「だってこの格好が便利なのだもん。君たちのような格好はとても着づらくてさあ」

「まあ……気持ち解らないでもないが……」

「そんなことよりアメノトリフネをどうにか解放してくれよ。僕が言つても聞かないのだもん。まあ、フツヌシは僕のこと嫌いだからねえ、致し方ないことなのかもしれないけれどさ」

「致し方ない……って、意外にもあつさりと受け入れるんだな」

「だってしょうがないでしょ？　そう簡単に物

事が進まないのなら、少しはこの事実を受け入れたほうがいいですよ。そういえば昔もあったなあ……、結局あの時はどうにかなったけれど、今回もなんとかしなければいいね」

「諦観するんじゃないねえ。こっちはどうにかしてアメノトリフネを解放しなくちゃならねえって言っているのに。行動も示している」

「でも結果は？」

「……惨敗だ。動く気配すらない」

「だろう？ ……と偉そうに言ってみたけれど、僕も全然打つ手なしだ。僕もなんとか交渉して一回会わせてもらったよ」

「いつ？」

「ついさっき」

「あの野郎、俺たちには会わせる素振りすら見せなかったぞ」

「……ま、仕方ないんじゃない？ 取り敢えず、もう一回言ってみれば？ 会わせてくれると思

うよ。もつと言うならば、席を外してもらうこともできる。ま、その時に脱出することは不可能だけれど」

「何故？」

「結果を張っているんだ。結果を張っているから、誰が出て行って誰が入ったかも解るだが、その結果は不完全なものだから、中を見ることが出来ない……。どうにかそれを使って出来ないか、と考えているんだけど、なかなか難しい話だよ」

意外にも二回目の訪問であっさりとアメノトリフネに会わせてもらうことが出来た。

アメノトリフネは少女だった。黒い髪の少女だった。身長はササノオと同じくらいだったろうか。

「……お久しぶりです、ヤタガラスさん。それ

にはじめまして……でいいんですかね、スサノオさん」

「お久しぶり？」

「私は二回目なんですよ。ここに来るのは」

「ふうん……そうか。で、あんたをここから連れ出そうとどうにか考えているわけなんだが……」

「どうにも出来ないでしょう。結界がある以上、ここから抜け出すことは不可能です。フツヌシよりも格の高いカミサマが来れば話は別でしょうが……、少なくとも私にこの結界を解除することは不可能です」

要するに、手詰まりだった。

「どうにか抜け出す方法はないのか……。抜け穴とか」

「ありません。そういうものは徹底的に排除したと言っておりましたから。というよりも、そんなものがあったとしても結界によって脱出す

ることが出来ないから、それに絶対的自信を持つていてるのではないでしょうか」

「そうか……。なんとか力になりたいが、考えておこう。また明日、ここに来るよ」

「解りました。……あ、そうだ。ヤタガラスさん、香織さんに伝えてもらってもいいですか？ 今日のお食事について」

「食事？ ええ、構いませんよ」

「今日の夕飯は粥でお願いします、と伝えてください」

「粥、ですね。解りました」

そしてスサノオたちは部屋を後にした。

スサノオたちは明日また訪れることにしようということで、その日は三途川姉妹の住む別邸で眠ることとした。スサノオだけ男神なので、眠る部屋は別にされてしまった。また、三途川姉妹は料理をいつもより多く振舞っていたらしい。なぜならここにあまり人が訪れないからだ

という。タケミカツチは少食だからあまり食べなくて困っていた、とも言っていた。

だからその分が回って——スサノオとヤタガラスは大量の食事をする破目になってしまった。

そして、翌日。

事件は発生した。

### 3

その日は朝から雨が降っていた。雨は降り注ぎ、とても傘を差さないと出るのが鬱陶しくなる。

三途川香織が朝食を持っていく。それを横目に三途川伊織とスサノオ、それにヤタガラスとタケミカツチは朝食を取っていた。

「……ところで、どうするつもりですか」

ヤタガラスは唐突にスサノオに訊ねる。

スサノオはスプーンを咥えながら、言った。

「どうするかなあ……」

「未だ考えついていない、ってことですか」

「……そういうことになるな」

スサノオの言葉に、ヤタガラスは頬を膨らませる。

「そんなこと言ったって、何も解決しませんよ。

先延ばしにすればどうにかなる……とか思っていますよね？」

「いいや、別に。それじゃ聞くが、ヤタガラス

……お前はそれなりに考えついているのか？」

「うーんと、考えついていないことはないですけど……」

「じゃあ、言ってみろよ。そしてどういうもの

かきちんと吟味してみようぜ。間違いがあるかもしれないし」

「あるかもしれないし……って、そんなことは

無いですよ。あなたは間違っているという証明

が出来るんですか？」



「それ以上に間違っていないことを証明するほうが難しいと思うけれどね。だつて考えてみる、モノだつてそうだ。そこにモノがあつたという証明は出来るかもしれないが、モノが無かつたという証明は不可能に近い。悪魔の証明、つてやつだよ」

ドタドタドタ、と音が聞こえたのはちようどそのタイミングでのことだつた。どうやら誰かが板張りの床を走っているようだつた。板張りの床は走るとけっこう響く。だから、誰かやつてきたのかくらいはだいたい把握出来るものなのであつた。

「姉さん、大変です！」

息を切らしながら入ってきたのは三途川香織だつた。まあ、彼女しか考えられないだろうと思つていたのは殆どだろう。

三途川伊織は麦茶を飲みながら、

「何ですか騒々しい。それにどうしたのですか、

そんなに汗だくで。また夏でもないというのに」  
「そういうことではありません！ 是非、スサノオ様にヤタガラス様もお越し下さい！ 大変なこととなつてしまいました！」

「大変なこと？」

スサノオは呟く。

「それはいつたい、どういうことだつて言うんだ」

スサノオはつまらなそうに呟いた。三途川香織が言っていることなど聞く必要がないと思つているのかもしれない。

その反応を大きく覆す言葉を、三途川香織は言つた。

「とにかく、社へお急ぎください。フツヌシ様も既に待つておられますから！」

その言葉の真意をスサノオたちが知ることになるのは、それから数分後のことであつた。

社内部。

フツヌシが何も言わないのを見て、スサノオは首を傾げる。いったい何が起きたのか、まだ彼は理解していないのだから当然だ。

そして三途川香織が襖を開けた。

死というものは必ず訪れる。

それは人間であつても動物であつても……カミサマであつても同一だ。同一に、死の概念は存在するしそれから逃れることなど出来ない。ただ、それぞれ死へのタイムリミットが異なるだけで、あとはまったく変わらない。死は等しくやってくるのである。

その中でもカミが死ぬというのが滅多にやつてこない。それでも外的要因によつては死に至ることもある。しかし、一番死にやすいのは『人

間に信じてもらえなくなる』ことだろう。人間がそのカミの存在を信じなくなれば、結果としてそのカミは存在意義を大きく失つてしまう。それによつてカミは消え——死ぬ。

そこに広がっていた光景は残忍で残虐で、少しだけ滑稽も混じっているようなものだ。誰かに見せるために、このシチュエーションが作られたといつてもおかしくない。

いや、現に実際。

そういうふうになっているのだ。この死体は見せつけるために、『飾られて』いる。

誰の死体か、など今更訊ねる必要もない。

「……アメノトリフネ……」

そこには、アメノトリフネの死体が壁に磔とされていた。

アメノトリフネの容姿をあまり見なかったスサノオだったが、それでもそれは彼女が死んだということを考えてたくなかった戯言ではないか

と思わせる。

口はだらしなく開かれており、生きている感じをまったく思わせない。そしてその口にはナイフが突き刺さっている。ナイフ、とは言ったが恐らく刀を一気に突き刺したのかもしれない。ただ、刀身の殆どが口内にあるため刀身がどれほどの長さなのか解らないのである。

目は閉じられていた。いや、閉ざされていた。よく見ると縫われていたのだ。わざわざ縫ったのだろうか。理由は解らない。さらに彼女の顔は火傷のようになっていた。全身ではなく、顔だけだったが、それだけでも酷い姿だった。カミもこう呆気なく死んでしまうということをも、まざまざと見せつけられてしまった——そう言うてもいい。

決して貧相ではないが、小ぶりの胸も左右に開かれていた。まるで外科手術のように開かれたそれから肋骨や臓器が見える。基本として人

型のカミは中身も人間に近い。だから臓器は人間とほぼ同じものが揃っている。そして、臓器は引きずり出され、その場に投げ出されている。胸が開かれた傷は臍を通り越し、股の部分まで到達していた。ほぼ二つにされていた、と言ってもいい。

足も酷い有様だった。足は重力に従ってぶらぶらとしているが、しかしその動きからして骨が充分に通っていないようだった。即ち、足内部分にある骨は完全に破壊されたと言って間違いないだろう。

そして目線をひくのが——身体の数箇所に打ち込まれている大きな釘だ。それを抑えるために、壁に抑え込むために打ち込まれたと言ってもいいそれは、頭と両の掌、両の足首、そして心臓に打ち込まれていた。その位置から血が流れていた跡が残っており、白い壁に際立った模様と化している。

血塗れのアメノトリフネが、壁に磔となつて  
いる。

その光景を見て驚く者さえ居たし、溜息を吐  
く者も居た。とにかく、それを見て誰もが何ら  
かの感情を示したのは確かだろう。

そして、誰もが思った。この行爲を行ったの  
は残酷とか残虐とかさういうもの以前に、意味  
が理解出来ないということに。この行爲をした  
意味が、まったく理解出来ないということに。

それは当然かもしれないし、普通の思考であ  
つた。考えられない思考でもないし、一番順当  
に考えることだろう。

そして——次に目線が動くのは白い壁だ。彼  
女の身体、その隣に文字が書かれていた。赤い  
文字だった。血で書いたものなのかもしれない。  
そして、それを書いたのは被害者であるアメノ  
トリフネではなく犯人だと思わせる。

《劍神よ、これ以上彼女を苦しめるな》

流暢な日本語で、そう書かれていた。

それを見たフツヌシは笑っていた。うっすら  
と笑っていた。子供のように無垢で、純粹で、  
無邪気な笑顔。フツヌシの笑顔はそう形容され  
る。

フツヌシは——こんな表情をしたことがあつ  
たのか。それを隣で見ていたスサノオは思った。  
彼と触れ合う機会が無いから情報でしか知り得  
ていないスサノオだったが、そこでスサノオは  
フツヌシの本心を思い知る。

狂っている。

「くそつたれ……」

スサノオは気がつかないうちに、それを呟い  
ていた。

そして彼は、小さく舌打ちして部屋を後にす  
る。それを追うように、ほかの登場人物も後を  
追いかける。

ただ、フツヌシだけはそれをしなかった。そ

れについて問う者もいなかった。

フツヌシとアメノトリフネは、見つめ合うように、そこに佇んでいた。

続きは、2015年冬発行の「神集いせよ、

あめつちのかみ 第二編」でお楽しみください。

次号では、同じく2015年冬発行の「変身願望」掲載の「僕は吸血鬼になれない」試読版と特別短編の掲載を予定しております。

——夢を見ていた。

人魚姫の夢だった。

人魚姫は王子に恋をして、人間になろうとする。

けれども人魚から人間になるのは大変なことだ。魔女に会い彼女は人間になるための薬を手に入れた。

だけれど人魚はその代わり、美しい声を失った。

それでも王子に会いたい一心から彼女は人間になった。

そして、そのあとどうなったか——それは皆

知っている話だろう。



蓮野陽香の記憶

それは人魚のように、淡くもろい記憶だった。それを客観的に見せられている御行篝。隣に立っているのはもちろん闇の垂霊だった。

闇の垂霊は笑みを浮かべてただそれを見つめていた。

対して篝にとつてこの光景は幾度となく眺めてきた光景だった。だから、こんなものをいまさらのように見ても何の意味もなかった。

「あなた、何のつもりよ……!」

篝は闇の垂霊の胸倉を掴んだ。

「なんだい、怒っているのかい? だとすればお門違いだね、これはあくまでもリピートだよ。客観的に今までの出来事を確認しているだけに

過ぎない。だから、何も関係ない。僕たちの物語はこれでおしまい。これで始まって、これで終わる。そのための再確認とでもいえばいいかな」

「これをして……何の意味があるというのよ！ただ私を苦しめたいだけ……というのなら、あなたほんとうに最低最悪な人間ね」

「だって僕は、人間じゃないから」

あつさりと、闇の垂霊は言った。

間違っていないが、いざ真実を言われると簞には何も言えない。

「……さて、僕はこんな無駄話をするために君と話しているわけじゃないんだよ？ 僕だってきちんと有益な情報を君に伝えろという役目がある」

「何が……言いたいなのよ」

「一応、あえて言っておこう。この世界は、清白優業によってリセットされようとしている世

界だ。君は再びやり直しの因果に捕らわれたというわけだね。……しかし状態はあまり芳しくない。はつきり言つて、これは我々も予測できなかった事態だ」

「あなたたちがこの状況を生み出してにおいて、実際は予測していなかった、ですって？ 聞いてあきれろ。だったらなんで優業はまたそのようなことになったのよ」

「話は最後まで聞くものだよ。つまり……そうだね。簡単に言えば、この世界のリセットは、もともと僕たちの計画には無かったものだ、ということだ。そしてそれは僕たちが止めることは許されない。過干渉、といえればいいのかな。そういうことになってしまふからね」

「過干渉、ねえ……。はつきり言つて前もずつと過干渉し続けてきた。そう思うけれど？」

「それについてはこの際忘れよう。今回は、君も関わりがある。失敗してしまえば、この世界

は消失しかねない。リセットに失敗してね」

闇の垂霊の、その言葉を聞いて篝は顔面蒼白させる。

「……どうということよ、それ」

「だから、それをこれから話すんだよ。もっとも、いまから話すのは彼女たちの『記憶』。リセットされて海の藻屑へと消えていく、彼女たちだったころの記憶。それを君には、記憶してもらおう。そして彼女たちに戻す——それが君の仕事、君に授ける役割だよ」

『RISING mini』第九号に続く。



第十二話

輝きの洞窟。

「ここが輝きの洞窟か……」

イクスたちは輝きの洞窟へ到着した。

理由は単純明快。メガストーンがあるかもしれない——そう思ったからだ。

「メガストーンがあるかもしれないから……ここにやってきたはいいものの、ほんとうにあるのかなあ」

「ストーン、っていうくらいですからきつとあるでしょう。ほら、『石』ですし」

イグレックの言葉に答えたのはトロバ。

「そういう意味で言ったんじゃないけれど……。そもそも採掘されているなら、もつとメガストーンって有名になっていると思わない？」

確かにイグレックの言うとおりだった。

この輝きの洞窟は化石がよく採掘されることで有名な洞窟である。過去にも様々な化石が採掘され話題になっている。

しかしながらメガストーンが採掘された、という報告はない。

だからこそ、イクスたちは気になっていたのだ。

このような場所に、ほんとうに——メガストーンはあるのだろうか、ということに。

「き、きつとありますよ、メガストーンは……」  
トロバが落ち込むイクスたちの気分を鼓舞させようとするが、彼らの空気は重い。

「でも、ほんとうにメガストーンはあるのかしら……。ただの化石しか見えないけれど」

そもそも。

輝きの洞窟は、石に付着しているコケがエメラルド色に輝くことにより、方向感覚がずれて

しまうから、別名『迷いの洞窟』とも言われている。

石が採掘されることを有名にしているわけではない。

「……ねえ、取り敢えずここから出ない？　もう、見た感じどこにもないし……」

そうイグレットクが言う前に——イクスがある一点を指さした。

そこにあつたのは——居たのは、赤いスーツの男だった。

「……誰だろう？」

そう言つて、男も反応して、踵を返す。

その男は、正面から見ても、不思議なファッションだった。スーツもネクタイもサングラスも凡て赤で決めたファッションの男だった。髪も何だかよく解らない髪型をしており、至極目立つ男だった。

「まさか、このようなどころにお子様が来ると

はね？　ここは立ち入り禁止だったはずだが……」

「そのようなことは出ていませんでしたよ？」  
答えたのはトロバだった。

「……そんなことは関係ない。私たちにとつて、ここは大事な場所なのです。メガストーンを手に入れるためには。しかしここにはメガストーンが無かつたらしいですが」

「やっぱり、無かつたの」  
イグレットクは溜息を吐いて、踵を返そうとする。

しかし——彼女たちの背後にいた赤スーツの男を見て、硬直する。

「立ち入り禁止にしていたはずなのに、すいません。私が失敗したようです」

「お前のせいか……。まあ、いい。丁重に去ってもらうだけだよ」

そして、ポケモンバトルの幕が開く——。

「……そこまでよ」

赤スーツの男の背後には、さらに女性が立っていた。

パーカーを着た女性だったが、お淑やかな雰囲気が出ている。パーカーを着ているはずだったのに、そうではない、ドレスのような恰好を着ているように見える――。

そしてその姿は、イクスたちが見たことのある女性だった。

「カルネ……さん？」

カルネの隣に立っていたのは、サーナイト。

「怪しい雰囲気のスーツ男を見つけて追いかけてみたら……、やっぱり怪しかった。どうするつもり？　いたいけな少年少女を」

「カルネ……。確かボスが最重要人物としてマークしていた……」

「あら、そうなの？　光栄ね。でも、そうだとしても……この状況は許せないなあ」

そして彼女は首にかけたペンダントを手に取る。

同時に、サーナイトが持っている七色に輝く石が、眩い光を放つ――。

「本当はあんまり見せたくないのだけれど、この状況を看過するわけにもいかないし」

サーナイトの姿が――ゆっくりと変化を遂げる。

「見て居なさい、トレーナーさんたち。これが――メガシンカよ」

そこにあつたサーナイトは、今までのサーナイトの姿ではない――別の姿となっていた。

# ぼくらはポツキー戦士 第一部 元結編

## 第二回

3

遠いどこか。

山奥にある研究所。

人はそれを研究所と呼ぶか、或いは廃村と呼ぶか。はたまた別の名前で呼ぶのか。

少なくとも西暦二〇一四年現在その場所に人が立ち入ることは少なく、よってその場所にあるのか誰も知り得なかった。

その場所を、知る者はこう呼ぶ。

『怪物化残売品対抗手段研究開発施設』。それがその施設の名前だった。

怪物化残売品、それはいわゆるアンソウルド・モンスターを駆害しく表現したものであり、

それに対抗する手段ということは代表的なものでいえばポツキー戦士であろう。しかしポツキー戦士だけが対抗手段ではない。ポツキー戦士が生み出されたのはいわゆる『偶然の産物』であり、必然たる対抗策では無かった。

今、廃村の中心に立つのはひとりの少女。

華奢な身体だった。身長は普通の女子中学生よりも頭一つ分少なく、いわゆるお子様体型というものだ。優雅なお嬢様を思わせる亜麻色の髪はツインテールとなっており、それが風に微かに揺られている。服装はセーラー服、頭にはインカムを付けていた。

『——これより実験を開始する』

インカムに装着されたイヤホンから聞こえる声は彼女にとってとても耳障りだった。

だが彼女にとってその声の主は直属の部下であり、感情を理由に投げやることなど出来ない。今の彼女にとってこの状態が凡てであり、これ

以上のものなど無い。今の状況を自ら投げ捨てることなど彼女にはできなかった。

「……実験内容を確認します。今回の実験は、インカムを通じ、質問する。

だが。

その余裕すら、彼女に与えられなかった。

横から振り下ろされた大きな剣によつて、彼女の行動は遮られた。

彼女はそれを瞬時に判断し、その剣とは逆の方向に跳躍する。

高い跳躍。空に浮かぶ彼女の姿はまるで天女のように美しかった。

その美しさ、襲いかかっていた人間も見とれてしまう程だった。

そして、少女は優雅に着地——しなかった。

それは着地というよりも落下に近かった。

地面にモロに叩きつけられた彼女の身体は無事では済まない。普通の人間が見ればそう思う

ことだろう。

だが、彼女は違う。

普通の人間などではない。

襲いかかる人間たちを横目に彼女が取り出したものは——アーモンドポッキーだった。

こんなタイミングで優雅におやつでも食べるのか？ 『普通の人間ならば』そう思うに違いない。

だが、彼女は違う。

ただの人間などでは無いのだ。

刹那、彼女の周りに氷の華が咲いた。

襲いかかる人間たちだけではなく、地面、木々、家などを一気に凍らせたのだ。その景色はもはや芸術的とも言える。

それを行った彼女といえは涼しい顔で、インカムを通してこう言った。

「……こんなもんでいいかしら。実験は？」

イヤホンからは何も聞こえなかった。その時

は大体オーケーという意味だと彼女は知っていた。

空を見上げると、そこには月が見えていた。

「最強のポッキー戦士と最強のアンソウルド・モンスター、か……」

彼女は呟くと身を震わせながら、その場を後にした。

4

「新しいポッキー戦士を投入……ですか？」

支部長は、電話の相手にそう問いかけた。

電話の相手は何か難しいことを言っているようだったが、支部長の周りには誰もいない。よって、その事実を知り得ることが出来るのは支部長ただひとりであった。

電話を切り、支部長は舌打ちする。

「いかがなさいましたか、支部長」

そう言ったのは能美だった。

能美の言葉に支部長は首を横に振る。

「ああ。別に何の問題もない。ただ少し厄介なことになってしまっただけだ」

「厄介なこと？」

「新しいポッキー戦士を『開発』したらしい。

そしてその試験運行をここで行うというのだ」

言葉だけ聞くと、ポッキー戦士がロボットか何かだと思えてしまう。能美もそう思う。

しかし違う。ポッキー戦士はただの人間だ。

確かに人間離れた動きを見せることもあるが、普段はただの人間なのだ。

「……お言葉ですが、それだけを聞くとポッキー戦士を人間的に扱っていないと思われます。言葉を選んだほうがいいかと……」

「そう言ったのは、在庫監視委員会の委員長だ」

場の空気が、明らかに凍りついた。

在庫監視委員会委員長。

それは即ち、アンソウルド・モンスターと戦っていく人間たちからすれば、逆らうことの出来ない絶対的立ち位置に居る存在だ。その委員長からポツキー戦士を機械呼ばわりして、新しいポツキー戦士を寄越すというのだ。

「何か裏があるのでしようか……」

「しらん。そんなものは知りたくもない。私にとつて、面倒臭いことばかり増えていくのは非常に面倒なことだよ」

支部長は言った。だがそう言っても現実が変わることはない。

あくまでも、現実逃避だ。

現実逃避をしたいくらい、実直な事情と対面しているのだ。

「しかも厄介なことに、新しいポツキー戦士と古いポツキー戦士のマッチングはこちらではなく、委員会が直々にやると言い出している」

「委員会が直々に」

能美はその言葉を聞いて思わず仰け反った。

当然だろう、今まで委員会は各支部に自治権を与えていた。即ちそれが意味しているのは、自治権を剥奪しているということに等しい。

「どうして抗議なさらなかったんですか！」

「私が抗議もせずにただ従う、狗のような存在だと思つたかね」

能美は何も答えなかった。

支部長はそれを見て、さらに話を続ける。

「私だつて抗議した。私だつて否定した。それくらいの権限はこちらに与えられているはずだ、とね……。だがそれでも許可されなかった。こちらがやると言つて聞かなかつたのだよ」

「即ち……何か裏があるの？」

「可能性は大いにあり得る」

支部長はそう言つて机に置かれていたコーヒーカーップを持つと、コーヒを一口啜った。少し熱かつたようだが、それでもそのまま一口飲

み続けた。

「まあ、彼女たちのことだ。普通に何とかして  
くれるだろうが……。それでも油断は出来ない」

「確かにそうですね。相手が正義であるとは限り  
りません」

「そう。だからこそ不安なのだよ。疑問に思っ  
ている、と言ってもいいかもしれないな。どう  
すればいいのか解らない。我々の考えている以  
上に、ぐり子さんと江崎くんは強くなっている  
のだから」

「でもいつか、彼らも壁にぶつかるとは無い  
でしようか」

「と、言うところ？」

「いや、あくまでも仮定の話ですよ」

微笑んで、踵を返し。

能美は支部長室を後にした。

支部長はそれを見て疑問を浮かべたが——す  
ぐに忘れた。

つづく。



「予告」

『小説版ほくらはポッキー戦士』第一部「ミカド  
教団編 Complete Edition」刊行決定！

2014年から連載している「ポッキー戦士  
小説版」を上下巻二分冊で刊行いたします。

上巻は第一章～第四章（本編1～12話まで）  
を収録した本編204ページ＋短編「受難」「ハ  
ロウィン」「クリスマス」を収録した合計239  
ページ！

下巻は現在連載中の第一部完結編と書下ろし  
「Episode:11」「Episode:12 One more final.」  
を収録！ さらに短編「まるかぶりジャイアン  
トポッキー」「コミケに行く」「pocky day」ほか  
書下ろし短編を多数収録！

上巻の刊行は2016年1月11日！

下巻の刊行は2016年早春予定です。

ついに完結します、「ほくらはポッキー戦士」第  
一部を最後までお楽しみください！

（なお、第一部完結編につきましては、RISING  
III. 及びピクシブで最後までお読みいただけ  
ます。）

※「ほくらはポッキー戦士」はやまくじらさん  
の同人誌「戦え！ 僕らのポッキー戦士」を原  
作にした小説です。原作はもつと（たぶん）は  
ーとふる要素が詰まっていると思いますので、  
興味を持たれた方はそちらをどうぞ！

## 奴隸少女の勇者道

0

ガラムド暦2774年、大盗賊リムファス・ゴールが捕まった。

理由は自らの出頭によるもので、それを聞いた世界は大きくざわついた。

リムファス・ゴールは彼の首を代償に、彼がリーダーを務める盗賊団『黒い狐』の無罪を要望した。

神国教会の神官レヴールはそれを了承し、リムファスを逮捕した。

しかし、神国教会はリムファスを斬首刑に処

したあと、『黒い狐』を徹底的に破壊し壊滅し残滅し殲滅した。破壊の限りを尽くした。

リムファスには子供がいまいと言われている。しかしながら、彼と関係を持っていた女性はいまにも多いため、その判別がつかないという現状もあった。

雨が降ると、私は『あの記憶』を思い出す。高い高い塔の上で、父さんが男の人に捕まっていた様子。

それを見ていた人たちは父さんを助けることもなく、何か言っていた。

——やめて。

——怖いよ。

父さんがいない。

いつもなら、父さんが抱きしめてくれるのに。

父さん、父さん、父さん。

父さんはどうしてそこにいるの？

父さんは何をしてしまったというの？

父さんは悪くない。父さんは悪くない。

やめて、父さんを悪く言わないで。

やめて、父さんをどうするとうの。

男の人は持っていた刀を、父さんの首目掛けて振り下ろした。

その時のニヤリと笑みを浮かべた表情を、私は忘れることが出来ない。

雨が降ると、私は未だにその笑みを思い出して——震えが止まらない。

もうやめて、もうやめて。

父さんを——つれていかないで。

そして、あの日を最後に、『私』は『私』を捨てた。

雨が降っている。

雨は嫌いだ。あの記憶を思い出すから。

雨が嫌いだから、雨の見ない場所へ行こう。

でも、そんな場所なんて見つからない。

だから今日も——僕は動く。

この世界を、町を、人を呪って今日も生きる。

泥水を啜ってでも、僕は復讐してやる。

あのことをした——男を、僕は絶対に許さない。

教会を後にしたシスター・レミリアとイヴァンは道中たくさんの会話をした。その殆どがイヴァンが話し手でレミリアが聞き手というパターンで、彼女はずつと楽しそつうに話をしていた。レミリアは思った。

イヴァンはずつと一人で生きてきたのだろう。奴隷という身分がどれほど苦しいものなのか、彼女は経験こそしたことはないが、理解できる。城壁が見えてきたとき、イヴァンはびよんびよん跳ねて言った。

「あれはいったい何？」

「あれは、街よ。今は魔物がいるからそれに対処するために大きな壁を街の周りに作っている

の。それで守れるかどうかは正直不安なところだけだね……」

そう言つて、レミリアは溜息を吐く。

彼女とともについていくことを決意した彼女であったが、よくよく考えれば困難を極める旅であったことは事実だ。神国教会は今や世界的に勢力を広めている団体であり、街も神国教会の庇護下に置かれている場所がそれなりに存在する。とはいえ、その場合は神国教会の旗が遠くから見えるようになっていし、ほのかに柑橘系の匂いがある（これは街の周りに聖水を流しているからであり、魔物を近づけにくくする作用がある）。だから見分けはつきやすい。

それに今、レミリアが向かっている街は一番旅の中で安心できる場所だろう——彼女はそう思っていた。



自由の街レスポーク。

名前のとおり、自由で構成されている街だ。住民は何をしても構わないし、自由に出ていつでも構わない。

ただし、その自由を守るためにルールが幾つか制定されており、それさえ守れば自由は保証されるといふ条件つきである。

関門を潜り、レスポークに入る。街に入ると人の声が大きくなったような気がした。

ここには様々な者がいた。人間はもちろん、動物と人間のハーフのような存在である獣人もいる。通常獣人の住民権を保証する街はあまり多くないのだが、それもレスポークだからこそというわけだ。

そういうこともあって、レスポークは世界で一番大きな街として言われている。

「わあ……広いなあ……！」

イヴァンは空を見上げて、言った。

レミアはそれを見て、微笑んだ。

「一先ず彼女たちは宿屋へ向かい、そこに荷物を置いておくことにした。とはいえ女性二人の旅であるから荷物はさほど多くない。それが意味することは荷物がそう持つていくことが出来ないということであった。」

「魔法のカバンでもあれば話は別になるのだけれど……」

「魔法のカバン？」

レミアの呟きに魅力的なワードが入っていたのを、イヴァンは聞き逃さなかった。

「ええ。魔法のカバンよ。これは質量を極小にすることでたくさんものが持ち運びできるの。これさえあれば楽なだけけれど……」

「買えるの？」

「問題はそこよ」

二人の旅のもう一つの問題、それは路銀だっ

た。

この世界には魔物がいる。魔物を倒せば体内にある鉱石が手に入る。それを換金することでお金が手に入るが——シスターと少女の二人では、それにも限りがある。

そもそも今の彼女が持っている路銀は教会にやってきた人がくれるなけなしのお布施である。だからそれほど多い量持っていないのだ。これもいつ尽きるか解らないし、尽きてしまつては今日のように宿屋も泊まる事が出来ない。

即ち、それが意味することは。

「とりあえず、あなたを安全にできる場所を見つけるまでは無駄遣い禁止、つてことかなあ……」

そう言つて、レミリアは大きな溜息を吐いた。



荷物を置いて、レミリアとイヴァンは買い物に出かけた。

というのも三日後にはこの街を出るためである。

三日という期限を決めたのは特に理由もないが、まあ三日くらいは余裕もあるだろうというレミリアの考えからだつた。それに、レミリアはもう一つ考えていることがあつた。

——イヴァンに、世界を見せてあげたい。

彼女はずっとマホロバで奴隷として働かされてきた。そんな彼女は世界を知らないのだ。だから、彼女が、レミリアが世界と一緒に巡つてイヴァンに世界を見せてあげたいと思つていたので。

「いろんなお店があるねー」

ストリートの一つはたくさんのお店が軒を連ねていた。それを見てイヴァンは笑つていた。

彼女にとって、この街の凡てが初めての経験

なのだ。先程ベッドに横たわった時も「こんなふかふかなベッド、初めて！」と言っていた。「教会のベッドもそれなりにふかふかだったでしょう？」とは流石にレミリアは言えなかった。この時間はたくさんの人間が買い物をするために賑わっているようだった。

人にぶつかりながら、進んでいく。

「はぐれないように、手をつないでいきましよう」

そう言ったレミリアの言葉を、イヴァンは忠実に守っているようだった。

イヴァンとレミリアは二人手をつないで、歩いていく。

そんな中、レミリアは背の低い子供にぶつかってしまった。完全にこちらの不注意だったのだ。「すいません」と小さく呟いてまた歩き始める。

しかし、それを遮る形でイヴァンは立ち止ま

った。

「イヴァン？ どうかしたの？」

「何か……盗まれたような気がする！」

そう言つて彼女は来た道を逆走していく。

「ちよ、ちよつとイヴァン！」

レミリアはそれを追いかけるように逆走する。人にぶつかるたびにその視線が痛い。すいませんと何度も謝りながら、彼女はひたすら来た道を戻っていく。

イヴァンの足はとても早く、またそれが継続する時間も長い。奴隷の生活でそのスタミナが身につけてしまったとでもいうのだろうか。だとしたら、それはとても皮肉なことかもしれない。

彼女は走る。その先にいる、何かを盗んだという人間の先へ。

対してレミリアはそれから少しだけ離れた位置で走っていた。というのも、盗まれたかどうか

かも定かでない今むやみに追いかけるのもどうかと思つてゐるためだ。

そのため、今レミリアは荷物を確認している。もし、何か無いのなら盗まれた可能性が上がる。「そんなこと、なければいいのだけれど……」

レミリアは独りごちる。

しかし、その期待は大きく裏切られてしまった。

彼女の一番大切なものが盗まれてしまった、というオマケつきで。

「嘘……！ 私の、わたしの大切にしていた、ロザリオがない……？」

ロザリオ。

それは神への祈りを捧げるときに使う十字架のことである。特に、シスターの持つ銀のロザリオは魔物避けの効果があるため、彼女は肌身離さず持つていたのだ。

それが、盗まれた。犯人はイヴァンが言った

あの子供だ。

そして、その子供は開けた場所に出たのを見計らつてこちらを見た。また自分は余裕があるとても言いたいのだろうか。こちらを見て笑つていた。

そして——レミリアは肌身離さず持つていた銀のロザリオを、こちらに見せつけるように持つていた。

「あのがき……大人をなめるのもいい加減になさいよ……！」

女性、或いはシスターらしからぬ気品の無い発言をして、レミリアは駆け出した。

それを見てニヒルな笑みを浮かべた子供は右に曲がつて路地裏に入った。数瞬遅れてイヴァンとレミリアも入つていく。

「レミリア、足速いのね」

走りながらイヴァンは訊ねる。どうやら息は上がつていないようだった。



「シスターは日々鍛錬を積んでいるから、まあこれくらいは……ね」

対してレミリアは若干ではあるが、息が上がっていた。どちらかといえばレミリアはイヴァンのペースにどうにかついてきている……そういう感じに見て取れる。

路地裏に入ると、そこは袋小路だった。しかし、突き当たりには少し高い金網があるだけだった。

そして、あの子供はイヴァンたちを見下ろすようにその金網の上に立っていた。

「おい、そのあんた！ 大人を見下すと酷い目にあうぞ！」

もはや普段の口調とは似ても似つかないそれになつていたレミリア。

それを聞いた子供は悪戯っぽく笑みを浮かべて、

「だったら捕まえてご覧よ、おばさん」

そして子供は金網を越えていった。

「おばさん……ですって？ 私はまだ十六よ……！」

どうやらさっきの言葉が最後の引き金になつたらしい。

レミリアは大地に手を向け、叫んだ。

「『エアール・ロック』！」

その叫びと同時に彼女は浮かび始めた。

いや、正確には彼女が岩のように固められた空気の上に乗り、その操縦をしているだ。

「イヴァン、乗って！」

その言葉を聞いて、イヴァンは慌ててレミリアの手を取った。

「げげっ、まじかよ！ まさかあれほどまでに高度な魔法を使えるなんて！」

子供はそれを見て驚いていたが、しかし捕まえるまいと走っていく。

レミリアとイヴァンも金網を越えて、その子

供を追いかけていく。

ここでイヴァンはある異変に気が付いた。

「ねえレミリア。……なんかさつきから雰囲気  
が変わってないかなあ？」

「雰囲気？ どういった感じにだ」「なんととい  
うか」

イヴァンは自分の服の袖を掴み、少しだけ俯  
いた。

「……あんまり近付きたくない雰囲気だと思  
う」



自由には必ず代償が存在する。それは光が在  
るところに必ず闇が存在するように。

そしてそれは、この自由の街と謳われている  
場所でも変わらない事実であった。

このレスポークという街は円形に出来ている  
街である。諸般の事情により真円ではないが、  
殆ど真円といって過言ではない。

その円の外殻を為すのが、彼女たちがやって  
来て宿屋を取っている場所——普通の人が知る  
『レスポーク』の姿である。

だが、レスポークはその円凡てがそうである  
訳ではない。光在るところには、必ず闇が存在  
するのだ。

通称『裏街』。外殻に住む人間は内殻のその場  
所をそう言うて蔑むことが多い。

そこは所謂暴力が支配する場所であった。暴  
力により何もかもを奪い取る——それが裏街の  
ルールのようなものだった。

裏街の人間が外殻に出ることは良くあるが、  
見つかってしまうと厳しく罰せられる。だが、  
裏街ならば何をしたって構わない。どんな法を、  
ルールを無視したって構わない。

そんな『何でもあり』な場所。それが裏街であり、自由の街レスポークの持つ闇だった。

2

裏街は自由の街レスポークの『影』の姿だ。

そこに住んでいるのはゴロツキであったりヤンキーであったり、とても治安が悪い。よくそういうスラングが聞こえることも多々ある。

「……まさかレスポークにこんな場所があっただなんて……」

レミリアはその光景を見て、そうつぶやいた。

「レミリアはここまで来たことがないの？」

イヴァンの言葉にレミリアは頷く。

裏街というのはいさ少し垣間見ただけでもその雰囲気は測り知れる。とても暗くて、とてもじめじめしていて、とても質素な町並みだ。い

つもあかりが照らされている『表』とは一目で違うことが解る。

「と、とりあえずあの子供は……！」

レミリアはあたりを見渡す。

その子供は直ぐに見つかった。子供は走って走って、鉄製の扉の中に消えていった。

「さて、こらあッ二」

その扉が完全に締め終わる前に、レミリアは強引にそれをこじ開けた。それを見ていたイヴァンは思わず愕然としてしまう。

ほんとうにレミリアはただのシスターなのか……そんなことを疑ってしまっくらいであった。

「イヴァン、急いで中へ！」

「レミリア。いったいあなたは何に追われているの……？」

イヴァンのその呟きがレミリアに聞こえることはなかった。

鉄製の扉の向こうには地下水道が広がっていた。とはいえ下水ではなく人々の飲み水などを流している上水のものであった。この街レスポークは人が多いためか上下水道が完備されている、世界でも珍しい街であった。しかし、それを彼女たちが知っているかどうかはまた別の話だ。

「……あの子供、ほんとうにどこに消えたってんだ……」

レミリアはあたりを見渡す。水に濡れないようにシスターがよく着用している修道着の裾を折ってピンで止めている。さらに下の方の部分を動きやすくするために切っているため、腰ぎりぎりまでスリットが入っている。これはもちろんもともと入っていたわけではない。可動性のために切った。その光景を見ていたイヴァンは、もう彼女がどこに向かっているのかすら解

らなかつた。

裏を返せばそれほどあのロザリオは彼女にとつて大事なもののだろう。

「……ねえ、レミリア。あのロザリオってどれくらい大事なもののなの？」

思い切つてイヴァンは訊ねた。

レミリアは少し考えて、

「昔、知り合いからもらっただけのものですよ。ただ、それだけのことです」

そう短く答えた。

そんなことをしているうちに彼女たちがもう数話に渡つて追いかけているあの子供は何かの扉の中に入つていった。そして、今度こそ入られないように直ぐに鍵を締めた。

「鍵、締められちゃったよ！」

「……しようがない。盗賊系スキルは持ち合わせていないんですが……この際仕方ないですよね？」

そう言つて彼女は心の中で神に祈りを捧げ、

『キー・オープンー!』

そう叫んだと同時に、その扉は開かれた。

「盗賊系スキルを持ち合わせたシスターなんて聞いてねえぞ!」

さすがの子供もそれにはもう参つた、という感じだったらしく、両手をあげてそれに答えた。

それが降参の合図であるということは、彼女たち二人には解つていたことだし、降参の合図を出している人間を無慈悲に攻撃しようなんていう心は、二人共持ち合わせてはいなかった。

「なんだよエルール、失敗したのか?」

「まあ何と無く失敗すると思つたけどねー。あなたのことだし」

エルールを縛り上げてネチネチと話し合ひという名の喧嘩を始めようと思つていたレミリアだったが、物陰から二人の声が聞こえて、レミリアはそちらを振り返つた。

そこに立つていたのは随分と奇妙ななりの二人だった。

片方は黒と白の服を重ね着している。腰に色褪せたスカーフを巻いていてニコニコと笑つていた。中性的な顔立ちだが話し口調からして女性ほかつた。

対してもう一人はズボンの中にワイシャツの下の方を突つ込み、茶色の帽子を被つていた。肩に手提げ鞆をかけていて、その手提げ鞆はたくさん何かが入つていた。何が入つてゐる、というのは具体的には解らなかつたが、今のレミリアとイヴァンには知る由もなかつた。

「まあ、ここまでついてこれれちゃつたんじゃあ逃げようがないし、しようがないね。僕たちの負けだ。エルール、盗んだものは返そう」

「何でだ! 銀のロザリオだぜ? そんなものさつさと換金しまえばあいつらに『税』を支払うことだつて出来る」

「税？ レスポークに税なんて存在しないんじやあ……」

訊ねたのはレミリアだった。

それに答えたのは黒と白の服を重ね着した、中性的な顔立ちをした子供だった。

「税が存在しないのは『表』だけの話だ。けど表に住むにはそれなりの地位と豊かな暮らしが出来程の金銭が必要となる。とはいえこの街の仕事は代々引き継がれるものばかり。ただし外の人間はそんなことを知らない。ほいほい騙されてこの街にやって来て、金を吸い取られるだけ吸い取られてそのままだ。だが生きるためには働かなくてはならない。……ここはそういうならず者ばかりが集まった街だ。そしてレスポークが必死に隠そうとしている闇だよ」

「……それじゃ、あなたたちはみんな」

「はつきり言つて、天涯孤独つてやつだよ。僕ら三人には家族がない。代わりに僕ら三人が

家族みたいなものだ」

「でも……この街に住むには、税が必要なのかしら」

「『ワイルドウルフ』って名前の盗賊団を聞いたことがないかい。ここはそいつらの本拠地だ。そして今は、そいつらがここを支配している。そいつらに認めてもらうには税を支払わなくてはならない」

「だが最近、あいつらは横暴を極めつつある……。あのやろう！ あいつらは父さんの場所を横取りしただけなのに！」

「父さん？」

「リムファス・ゴール……ついでいや、聞いたことがあるだろ」

レミリアの疑問に答えたのは手提げ鞆を装備した子供だった。

しかしながらイヴァンはそれが解らず、首を傾げる。

「リムファス・ゴルール……大盜賊団『黒い狼』の団長ね。悪逆非道の限りを尽くして、つい数年前に処刑されたと聞いたことがあるわ。それにして、まさか子供が居たなんて」

「父さんはそんな悪いことなんてしていない！悪逆非道だなんて、父さんを邪魔者扱いしていた連中が、勝手にそう言ったただけだ！」

「もしかして、これがあなたの言う『父さん』？」  
イヴァンの声を聞いてエルールは前を向いた。エルールが持っていたのは写真立てだった。

そこに写っているのは笑顔で被写体になっている男だった。顎髭を蓄えた男は、何処か威圧感がある。

エルールは頷いて、言った。

「ああ……そうだ。それが僕の父さんだよ」

大盜賊としてその名を知られるリムファス・

ゴルールは、処罰されたときに言われた『悪逆非道』な人間などではない。

彼がボスを勤めていた盜賊団『黒い狐』は表にも裏にも慕われる盜賊団であった。彼のアジトには常に人でごった返っていて、毎日のようにパーティが開かれていた。表の人にも広く裏街への門戸を開き、安全性を訴えた。そして表の人にも裏街へ住んで欲しいという希望を出したほどだ。

だから、だからこそ。

あの日、彼が捕まったというニュースを聞いたときは誰もが驚いたものであった。

どうして彼が捕まらなくてはならないのか。彼に困っている市民なんて、この街にはいないというのに。

——でも、それは間違いだ。

彼を嫌っている人間は、いた。

同業者の一部、そして彼のターゲットとされていた富裕層の人間だ。

きつと彼らがやったに違いない。『黒い狐』の

人間は皆そう思った。

だが、いざ連れて行かれるとき、リムファスは目をつぶって頷いた。

「ちよつくら行つてくるわ。なあと、直ぐに戻つてくる」

その言葉を最後に、彼は断頭台へと連れて行かれた。

そして、あの雨の日。

リムファス・ゴールは斬首刑に処せられた。街の住民はそれに対して何もいうことは出来なかつた。その理由が誰かの圧力によるものなのか、怖かつたのかは知らない。

ただ、あの時の判決を下したのは、ほかでもない神国教会の人間であつた。

だから、エルールはその日から憎むようになった。凡てを。

あの時見ていて、恩恵を受けていて、止めなかつた人間、すべてを憎むようになった。



それを聴き終わって、レミリアは深い溜息を一つ吐いた。

「……まさか、そんなことがあつたなんて。知らなかつたわ」

「あんたも神国教会のシスターなんじゃないのか？」

呆れ顔でエルールは訊ねる。

対してレミリアは胸を張って、

「つい昨日まではね。今はフリーよ」

そう言った。それを聞いてエルールは失笑する。

「フリーのシスターなんてきょうびきかねえよ。面白いやつだな、あんた」



「あんた、じゃないわ。レミリアという立派な名前があるのだけれど」

「レミリア、か。解った、覚えておくよ。よろしくな」

そう言つてエルールは右手を差し出す。

「よろしく、エルール」

それに答えるように、レミリアはエルールの右手を握り固い握手を交わした。

そのとき、彼女は何か右手に違和を覚えた。だが。

「邪魔するぜえ二」

それをかき消すように声が聞こえた。野太い声だった。その声は、この家——というよりアシトと言つたほうがいいだろう——の入口から聞こえていた。

そこにいたのは長髪の男だった。顎には鉄製の何かが装着されていた。きつと喧嘩のときに用いるのかもしれない。そして、それを装着し

ているだけで明らかに恐怖度が上がっているのもまた事実だった。

「別にそんなこと言わなくても入ってくればいい。……で、ワイルドウルフの幹部さんがなんのご用件で？」

エルールはその男の目の前に立つて言った。とはいえその男とエルールの身長差はとても大きく、エルールはその男を見上げる形になっていた。

男は目つきをきつくして言った。

「なんのご用件、じゃあねえんだよ。税を払いな、税を。お前んとこの盗賊団……『グレーフオックス』だったか？ そいつは活動するため税を払っていいえんだよ。そして今日が今月の期限だ。そろそろ払ってもらわねえところちも堪忍袋の緒が切れるぜえ」

「そう言つてもらつたところ申し訳ないんだが……今俺たちは金をもっていない。残念ながら

諦めてもらえないかな」

エルールは答える。

それと同時に男幹部はエルールの頬を叩いた。「……てめえ、調子に乗るのもいい加減にしろよ。何が親は大盗賊だ。親がいい身分だからって子供も必ずその身分を継げると思ったら大間違いだぞ、この井の中の蛙が」

「井の中の蛙、ねえ。それってあなたも同じなんじゃ何の？ そのあんたも」

そう口を出したのはレミリアだった。

「女が口を出すんじゃないよ」

そう言つて男はレミリアに手をかけようとした——。

——が、そこで彼は気がついた。彼の身体に突き刺さるような視線があることを。

その視線は背後にいるが、振り返りたくても振り返られない。振り返った瞬間に隙を突かれると思つたからだ。蛇に睨まれた蛙とはこのこ

とをいうのだろう。

恐る恐る、彼は振り返る。

そこに立っていたのは、ほかならないイヴァンだった。

「ガキ……このガキが、その視線を発したつていうのか？ 眼光を。視線を？ まるで隙あらば殺すといわんばかりの眼光を、このガキが？」

ゆっくりと男はイヴァンの方へ向かう。

イヴァンは恐ることなく、ただ男を見つめていた。

空っぽな目。

それが男にとつて、とても恐ろしかった。

何を考へているのか、男には解らなかつた。

イヴァンはずっと男を見つめている。

それから逃げたかつたのかもしれない。それをどうにかして払い除けたかつたのかもしれない。

「生意気なガキだ……。先ずはお前からぶちの

めしてやる」

そう言つて。

男はイヴァンに殴りかかった。

だが、彼の拳がイヴァンに届くことはなかった。なぜなら、瞬間的に彼の身体が凍らされ、そのまま崩れ去ってしまったからだ。

その一瞬の出来事に、エルールたちは目を丸くしていた。そして何も言えなかった。

レミリアはその沈黙を破るように言った。

「……どうやら、私たちも目をつけられちゃうみたいね」

「ああ、あんたら。とんだとばちりだよ」

エルールはそう言つて、溜息を吐いた。



その頃。

天つ国・マホロバにある神殿に一人の少年が立っていた。

彼の精悍な顔立ちは見るとを惹きつけ、彼のそばを通る女性が彼の顔を見ていくのは日常茶飯事であった。

神殿にて、彼は呟く。

「シスター・レミリアについて状況を報告しろ」

その声と共に現れたのは黒ずくめの男だった。黒装束、といったほうがいいかもしれない。

ともかくその黒装束の男は、その少年の前に跪いた。

「シスター・レミリアは『少女』とともに自由の街レスポークへと到着し、現在は裏街にて『グレーフォックス』なる盗賊団のアジトにいるとみられています」

「レスポーク……裏街……。ふうん、厄介なところに行ってしまったものだね。そのぶん『駆

「除」は簡単に済みそうだけど」

少年は頷く。

「……一つ伺っても構いませんでしょうか？」

黒装束は訊ねる。

「構わないよ。ただし、僕が答えられる範囲でね」

「あの少女を捕まえろとおっしゃられましたか？」

「……どうしてなのでしょう？」

「ああ、君には言っていないっけ。あの少女がどういう存在であるかってことを」

少年の言葉に黒装束は押し黙った。

少年はニヒルな笑みを浮かべて、言った。

「あの少女……イヴァンは、ある神託によつて選ばれた少女だ。その神託とは、簡単なことだね。なんだったと思う？」

「なんでございましょう。神託と言われると……」

「勇者とか、それくらいしか浮かびませんが」

「ぴんぼーん」

少年は冗談めいた口調でそう言った。

少年は話を続ける。

「あの少女は勇者の神託を受けているのさ。だからさつさとこっちで保護しなくちゃいけない」

「どうしてですか。別に勇者ならば捕らえる必要もないのでは……」

黒装束の言葉を聞いて、少年は溜息を吐いた。

「……ねえ、君」

「なんでございましょう」

少年は指を横にスライドさせた。

ただ、それだけだった。

直後、黒装束の首がなめらかにスライドして地面に落下した。

断面から血が出ることなどはなかった。

「少し話をしすぎた、なんて思わないのかなあ」

少年は笑っていた。

そして少年はゆっくりと歩き始める。鼻歌をしながら歩く光景はまさに少年のそれだ。年相

応に見える行動ともいえるだろう。

「……君は少々やりすぎなところがありませんね」  
褐色の肌をしたシスターが彼を見て微笑んでいた。

少年は呟く。

「……なんでここにいますか、レッサー」

レッサーと言われた彼女は微笑む。

対して少年はそれを見て、バツの悪そうな表情を浮かべた。

「トールさんに会いたかったからよっ！」

「たん、つてなんだ。たんつて」

そう言つてトールはおでこに手を当てる。

それを見て首を傾げるレッサー。

「トールさんはトールたん。それ以上でもそれ以下でもないさ。ところで、トールたんはどうしてシノビを殺しちゃうのかなあ？」

「あいつはしゃべりすぎた」

「困るなあ。シノビも消耗品じゃないんだから

さ。少しくらい手加減してやってよ。トールたんくらいだったら記憶をちやちやつといじくることだつて難くないでしょう？」

「シノビが消耗品じゃない、ねえ。どうせ君が作っているんだから消耗品で合っているだろう？」

「間違つていますよ。その考えは」

レッサーは溜息を吐く。そして持っていた杖を使って床をトーン！ と叩いた。

それだけのことだった。

床から何かが生み出された。

そしてそれが黒装束——彼女たちが言つていたシノビであることに気付くまでそう時間はかからなかった。

「相変わらずの遠隔錬成か。どれだけストックがあつたんだ？」

「トールたんのせいでもう一桁しかないよ」

「まだ、一桁あるんだな？」

トールは笑う。

レッサーは頭を掻いた。

「こんな横暴が許されるのは、君がそれなりの立場についているからだよ、トールたん。トールたんが今の立場についているのはそれなりに努力したからだってことを私は知っているけれど……。知らない人からすれば横暴極まりないんだよ、それくらい分かってよトールたん」

「いいから俺の名前にたんたん付けるのやめろ！」

「もー。釣れないな。トールたんは。いいじゃない、それくらい言ったって」

「……そんなことより、俺に何か用事でもあったんじゃないのか」

「おっ」

レッサーは何かを思い出したかのように、そう言った。

「そうでしたそうでした。トールたん、シスタ

ー・レミアアだけだね、今どうなっているか聞いた？」

「あのシノビから聞いたよ。なんでもワイルドウルフに喧嘩を売ったとか。こちらからしてみれば都合のいい話だ。それを利用する手はない」

「そう。そこであなたに提案なのだけれど……その作戦の締めをトール、あなたにお願いしたいの」

もうさきほどまでふざけていたレッサーはここにはいなかった。

真面目に彼女は、トールに提案していた。

トールはそれを聞いて、小さく溜息を吐く。

「ほんつと、レッサー。君はオンオフの切り替えがとても上手い。僕なんか全然オンオフの切り替えが出来ないというのに……。ま、そんなことはどうでもいい。いいよ、僕がやる。僕の手で『勇者』を捕まえてみせるよ」

「ありがとう、トール。それじゃ」

そう言つて。

レツサーとトールのふたりは、それぞれ歩いてきた方角へ向かうのを再開した。

### 3

その頃。

『グレーフォックス』アジトでは作戦会議が執り行われていた。

「……というわけで作戦会議を行う」

「わーぱちぱち」

そう言ったのはイヴァンだった。エルールは溜息を吐くが、流石に「お前の責任だ」とは言えなかつた。

彼も見ていた、あの魔法かどうかも解らなかつた何か。

何が恐ろしいといえぱリングを用いていない

こと。確かにリングを使わずとも魔法が行使出来る人間がいけないわけでもないが、そんな人間は貴重すぎるし相当な鍛錬を積まないと無理なことである。

しかしながら、この少女はそんな鍛錬を積んでいるようにも見えないにもかかわらず、そこまで強力な魔法を使っていた。その魔法をエルールは見たことがなかつたし、きっとここにいる人間があればほどの魔法を見たことはなかつただろう。

だからこそ、怖かつた。

無邪気に、自分が潰したい人間を潰していくスタイルが、もし彼女に根付いてしまったら？  
今はシスターのレミアアがいる。彼女がいる限り『正しい』魔法の使われ方をしていくだろう。

だかもし彼女が居なくなつてしまったら？

精神が強くないうちに、そのスタイルが根付

いてしまつて、レミリアがいないタイミングになつたら……きつとイヴァンは『勇者』というよりは『魔王』に近いポジションになるだろう。この年齢でこの魔法が使えるのは、敵に回せば脅威になるのは火を見るより明らかだからだ。

「……エルール、どうかした？」

——そんなことをエルールが考えているとは微塵も思っていないイヴァンは彼に訊ねた。彼はそのことを考えていたから、ずっと上の空になつていたのだ。

「ん、ああ。大丈夫だ。……作戦会議といこう」

「いや、それさつき言ったから」

レミリアからの厳しいツツコミが入る。

咳払いしてエルールは話を続ける。

「それじゃ……どうやつて『ワイルドワルフ攻略作戦』を立てていくか。まずは俺の考えたプランを話す」

そつ。

彼らが話しているのはさきほどイヴァンが幹部を倒してしまつた盗賊団『ワイルドワルフ』を倒すための作戦についてだ。

どうしてこのようになってしまったかといえ、レミリアのこんな一言がきっかけだった。

「私たち、とんだとぼちちりを受けているわけでしょう。実際はイヴァンが凍らさなければどうにかなつたんだから。……だったらいっそ、こつちから攻撃を試してみないかしら」

その言葉に賛同したのはエルール以外のグレイフォックスのメンバーだった。

白と黒の衣服を重ね着したような感じの女性——ティアは笑つて何度も頷いていた。目は輝いていた。楽しいことを聞くといつもこうなるのはエルールも知っている。

巨大な手提げ鞆を持った男性——アーツは何度も頷いていた。彼も了承しているようだった。

そしてイヴァンも目を輝かせてその言葉を聞



いていた。

——結果として、エルールの味方になる人間は、このグレーフォックスのアジトにはいなかった。

「ワイルドウルフのアジトはいったいどこにあるの？」

その質問をしたのはレミリアだった。

「ワイルドウルフのアジトはこの『裏街』の中心部にある、ウルフタワーだ。その目の前にはかつて大盗賊……俺の父さんを処罰した『断頭台』がある。そこは記念スポットめいたものになってしまつて久しいけれど、そこまで行くのはそう難しくない。寧ろ問題なのは……」

「その中、アジト内部ってことね」

その言葉にエルールは頷いた。

「そうだ。問題はそこになる。ワイルドウルフのアジトは一度だけ入ったことがあるが、あそこはほんとうに面倒臭い空間だ。先ず、入口には執拗なほどボディークェックを行う人間がいる。ボディークェックなのか、ワイルドウルフの構成員のひとりなのかは知らないが、あれは非常に厄介だ」

「ボディークェックくらい乗り越えられるでしょう？」

「そう言えるのはな、あんたくらいだよ。きっと」

レミリアはエルールの言った言葉の真意が理解できなかったが、直ぐに頭を切り替えた。

「話を戻すけれど、その中に入ったあと、どういふふうになつていいのかは知らないの？」

「解つたら苦労しない。それにガードも固いからね。難しい話なんだよ」

そう言つて、エルールは微笑む。

「正面突破する考えはないか？」

「正面突破出来ていたら苦労しない。それにあのタワーはとてつもない。一番上にボスがいるとしてそいつを倒せばいいのだから……、まあ、難しい話になるのは間違いないね」

難しい話、という表現を使うのが好きなのだろうか——レミリアはそう思ったが、それを口に出さないでおいた。



「……そうだ、一つ思い出した話があるんだ」

レツサーがそこから離れようとしたタイミングで、トールはレツサーに声をかけた。

レツサーは溜息を吐いて、振り返る。

「なあに、トールたん。わたしだってそれなりに忙しいのだけれど」

「それは十分に承知している。けれど、少しだ

け面白い話をするのを思い出していてね。これをしてないとなんにもつまらない。……そう、『勇者』の伝説に関する話だよ」

「勇者の……伝説？」

レツサーは二ヒルな笑みを浮かべる。

「そんな話題を振られて気にならない人がいるとも思っているのかしら。ほんとうにあなたは、悪い人よトール」

「そうかな。まあ、そうかもしれない」

どっちともつかない発言をして、トールは咳払い一つ。

「勇者ってのはね、ある一人のことを指すんじゃないんだ」

唐突に事実を告げた。

その事実を聞いてレツサーは目を丸くする。

「……それはほんとうかしら？」

「ああ。ほんとうだ。神に誓ったついで。では、勇者とは何か？ 勇者とは、記憶だ。人々

に根付いた『世界を救った』という記憶もある。

或いは人々とともに居た勇敢な人間ということもある。ともかく、勇者とは一括りにはできない。つまり勇者とはそういうことなんだ」

「それじゃ、勇者の定義はどうなるのかしら？」

「勇者の定義……。簡単な話、勇者は身体を持たない。魂が引き継がれているんだ。前世つてやつかな……。前世でも勇者をしていたのならば、それは必ず勇者だ。例えば引きこもりのニートだったとしてもね」

「家系……とはまた別ということ？」

「そういうことだ。現に彼女が『勇者』だと天啓が降りたのは彼女に勇者の素質があったというわけではない。彼女に宿る魂が勇者の魂だっただけだ」

それを聞いてレッサーは微笑む。

「あまりにも興味深くてあまりにも面白い話だったよ、トールたん。またこういう話を聞かせ

ておくれ。枢機卿の連中はたいい昔話で頭が痛くなるんでね」

「これはれっきとしたほんとのことだ。嘘じゃない、神に誓うって言っただろ？」

トールの言葉に、レッサーは耳を貸さない。

どうやら彼女はトールが話していることは本当のことではなく、おとぎ話のようなファンタジーのことであると考えているようだった。

「あ。それじゃ、私これから枢機卿の連中と会議があるのよ」

「そっか。君も大変だ。レッサー」

「あなたも大変じゃないの？ 勇者捜索を続けなくちゃ」

「ああ。そうだね」

そう言っただけは分かれた。

トールはレッサーが見えなくなるまで、ずっとそちらを見つめていた。そして、レッサーが見えなくなったタイミングで、彼はつぶやいた。

「……その話は、ほんとうなのね」  
トールは微笑み、踵を返した。

4

次の日。裏街中心部にあるウルフタワー最上階、ボスの部屋。

「……ボス、客人が来ているようですが」  
ボスと呼ばれた男は部屋の奥にあるソファに深く腰掛け、葉巻を啜っている。

「なんだ、こんな時間にか？」  
今は朝の九時。ボスである彼も起床したばかりで、朝の一杯を行っているタイミングでのことであった。

団員の一人は恭しく笑みを浮かべながら、  
「こちらでも『こんな朝早くから』とは言ってるんですが、『そちらにとっても有益なことだから

入れろ』とのことで」

「それで入れたっていうのか！」

ボスは机を叩いた。

「どうもどうも。ま、そんな怒らないでくださいよ」

そんな緊迫した状況を切り裂くように軽快な声が聞こえてきた。

扉からひとりの男が入ってきたからだ。いや、男というには幼い。どちらかといえば少年というほうが合っているような気もした。

それを見て、ボスは目を細める。

「ここはガキの来る場所じゃねえ。さっさと帰んな」

「怖いですねえ……。一応これでも神国教会の代表としてここに来させていたのですが」

それを聞いてボスの目の色が変わった。

神国教会はこの世界を裏から支配している存在ともいえよう。その存在の方からこちらに接

触をかけてきた。これは彼らにとって大きなチャンスでもあったのだ。

「おい、お前何している。お茶でももってこい！」  
さつきと態度を一変させ、ボスは部下にそう命令する。部下は敬礼を一つして階下へ降りていった。

ソファに腰掛けた少年は呟く。

「さつきとは態度が違うように思えますが……」  
「いや。なんのその。そんなわけはありませんよ。いつもこんな感じですよ」

葉巻の火を消して、『商売』の顔にチェンジする。これが彼の決まりでもあった。

それを見抜いているのか、少年はどこか艶っぽい視線で彼を見つめる。

「……それで、ですね。今日はひとつ、あなたたちワイルドウルフにとつても、我々神国教会にとつても素晴らしい提案を持ってきたのですよ」

「提案？」

ボスは首を傾げる。

少年はそれに続けた。

「この裏街について、我々の方によく苦情が来るのですよ。はつきりと言って、レスポークが自由の街と呼ばれているのにもかかわらず、犯罪が発生するのは裏街の治安の悪さが引きずっているのだ、世界の犯罪者の大半が裏街に居るだの……その意見は様々ですよ」

「意見というよりはまさに苦情ってやつだ。人間は幸福であればあるほど不遇な人間のことを見下す。そして『こんな人間がいるから自分の場所が脅かされる』だの、言うわけだ。そんなものはただの被害妄想にすぎん。襲われる奴は襲われる奴なりに理由があるはずだから。現に我々ワイルドウルフも、我々の定めた基準によつてターゲットを選出しているわけだから」  
「ええ。それはもう、充分すぎるほどに知って

おります」

少年は恭しく微笑む。部下が紅茶を持ってきたのは、ちょうどこのタイムングであった。少年の前に置かれた紅茶に、少年はミルクを入れてそのまま一口飲んだ。随分と湯気が立っているようだったが、息で冷やすようなこともしていなかった。

「それで？ 我々にも、そちらさんにもいいことがあるという提案とは、いったいどういうことなんだ？」

ボスは訊ねる。

少年は笑みを浮かべて、声のトーンを落とす、こう言った。

「ええ、ええ。簡単なことです。つまり、我々にとつてみれば裏街の評判は最悪だから何とかせねばならない。あなたたちからすれば裏街というこんなちっぽけな場所よりもっと世界に出るべきである……そう思うのですよ。ですか

ら、我々神国教会はあなたたちワイルドウルフに『裏街の破壊・機能の停止』を提案します」

「裏街の壊滅……だと？」

それを聞いて思わず言葉を疑ったワイルドウルフのボス。それも当然だろう。突然やってきた客人にそう提案されれば、耳を疑いたくなるのもはや当然のように思える。

少年はそんなことを考慮もせず、話を続ける。「いいえ……別にあなたたちワイルドウルフの住処を奪うなんて、そんなことは考えておりません。これは提案ですよ。あなたたちは裏街の全権限を提供する。私たちは『マホロバ』での優遇貴族の特権を差し上げましょう。それでいかがですか？」

優遇貴族。

その言葉を聞いてボスの心は揺らいでしまった。

優遇貴族とはマホロバにあるカーストでも神

国教会の枢機卿レベルだと言われている、非常に強い立場を持った人間のことをさす。彼らがそれになるということは、それに近い権力を振りかざすことが出来る——ということなのだ。

「……ほんとうに、優遇貴族にさせてくれるのか？」

「ええ」

少年は微笑みながら頷いた。

「我々も元からその予定で提案させていただいております」

「ほんとう……なんだな」

「ええ」

「ほんとうにそれが嘘偽りないと言えるんだな」

「ええ、誓いましょう」

そこまで念を押して、漸くボスは首を縦に振る。

「解った。その提案了承しよう。だが、俺たちはどうすればいい」

「話が早くて助かります。簡単なことです。もう、そんな時間がかからないうちに神国教会から方舟が来ます。ですので、貴重品やその他もろもろを持ち込んでいただいて……方舟にお乗り込みください。ご心配なく、皆さんを安心してマホロバへと送り届けるためのことです」

「……そうか」

少年はペラペラと言ったが、内容自体は簡単なことであった。

だからこそ、ボスは直ぐに了承しようとは思わなかった。

だが、優遇貴族の特権とマホロバへの定住という条件が彼の心をぐらつかせた。

このまま盗賊を続けていったとしても、部下に安定した暮らしができるほどの収入を与えることが出来るだろうか。ボスは日々そんなことを考えていた。だから裏街を支配し、税を徴収してきたのだが、その圧政にも似たことは何れ

崩壊するのではないかという不安もあった。

このタイミングでの提案は、彼にとつては寧ろ幸運であった。だからこそ彼は、その提案を了承したのだ。

凡ては部下を守るため。

……というのは建前に過ぎなかった。

本音を言うのなら、『あの男』が生きていたこの場所を離れたいと思っていたからだ。だが、彼らはほかの街でも盗賊をやっていたいけるほどのパイプはない。ほかの街に行くとなるとこの街で培ったものは凡て失うことになるからだ。

少年が去つてから、ボスはワイルドウルフの幹部を呼びつけた。

「……おい、グループはどうした」

しかし、幹部の数が足りなかった。幹部は四人いるはずなのに、三人しかいなかったのだ。

「グループならば、税の徴収に向かいました。

……ですが、それがあつたのは昨日のことです

ので、もしかしたらどこかをふらつき回っているのかもしれない」

答えたのは女幹部だった。

それを聞いてボスは舌打ちを一つ。

「このタイミングで……。どうしてあいつはこ  
う自由なんだ！ 仕事をやってくれるからまだ  
いいにしろ、普通の盗賊団ならクビだぞ、クビ！」

ボスは幹部三人に向けてそう激昂した。

彼らに言つても何も変わることはないのだが、  
ついボスはそう言つてしまったのだ。

「しかし彼が実際にこの盗賊団でそれなりの活  
動をしていることもまた事実です」

そう語つたのは先ほどの女幹部であった。

「それもそうだ」

ボスは素直に頷く。

女幹部は首を傾げる。

「ところで、今日は何のために集められたので  
しょうか？ こんな朝早くから、我々全員でど



「ここに襲撃にでも？」

「いいや、そういうわけではない。今日は仕事の話ではなく、もっともつと重要なことだ。大事なことでもあるな」

「重要であり……大事でもある。それは？」

「まあ、そう急かすな。……本日をもって、ワイルドウルフはこの裏街を捨てる。メンバーに荷物を揃えて今日中に玄関前に集合だ。家族がいるやつはそいつらも連れてくることを忘れずにな」

それを聞いた幹部三人は言葉を失った。

「オヤジ、それはいったいどういうことだ」

幹部の一人でありボスの息子である少年は言った。

その気持ちはほかの幹部もいっしょだった。

今までこの裏街を拠点に活動してきたのに、それを捨てる？ そんな判断を急にするなんて、いつものボスらしくない——彼らはそう思っ

いたからだ。

ボスは溜息を吐いて、答える。

「お前にも言わずに決めたことは悪いと思ってるよ。だがこれはお前たち幹部を含めた団員のことを考えて決めたことだ。頼む、素直に受け入れちゃあくれねえか。老いぼれの考えだが、きちつと筋は通っている」

「でもよ、ここを捨てるのはいいがどこに行くつもりだ？ ここでの権力を捨てて、また一からやり直すんでも？」

「いいや。いくらなんでもそういうことをするわけにもいかないだろう。それは決まっている。……俺たちはマホロバに招待されることとなった」

それを聞いて、首を傾げる。

「マホロバ……へ。どうしてまたそんな話が唐突に」

「さきほど来ていた客人を、お前たちは目撃し

ていただろうか？ あれは、少年に見えるが、実際は違う。神国教会からの使いだそうだ」

「神国教会の使いつてやつが、こんな辺鄙なところまでわざわざ来たとしてもいいのか？」

「ああ、その通りだ」

ボスは首肯する。

しかし彼はそれに納得しない様子だった。

「納得いかねえ……。それでその使いつてのがうちらにそれを提案したわけか？」

「まあ、そういうことになるな。もちろん、あちら側からの条件を提示された上での話になるが」

「条件？」

「ああ……裏街の破壊行為についての了承だ。

即ち、神国教会はこの裏街を目の上の瘤としていて、さっさと破壊したいらしい。まあ、そうだろうな。俺がその立場だったら歯向かう或いは不安の種になっている場所があればさっさと

潰すだろう」

「それで、それを了承したつていいのか！」

「ああ。これは私のためでもあり、ワイルドウルフを存続させるためでもある。あそこでもし了承かねていたら、裏街とともにワイルドウルフは終わっていたよ」

「だが……だからといって……」

彼は涙を流しながら、言った。

それを見て、ボスは目を細める。

「お前がこの街にどれほどの思い入れがあるのか、私だって知っている。だが、時代の流れには誰も逆らうことなんて出来ない。強いて言うなら、『勇者』つてやつくらいだろうな。でもそいつはおとぎ話の中でしか登場しないし倒すのは神国教会ではなくて『魔王』という絶対的な悪だ。神国教会の行為には甚だ疑問を抱くところもあるが、やっていることは善意だ。悪ではなくて、善だよ。そんなやつに、勇者が戦意を

むき出しにするとは思えない。勇者はいつだつて善の味方だから、な」

『RISING mini』第9号に続く。

## 人魚姫の遺した花

1

人魚。

水中に生息されていると考えられている伝説上の生き物である。ヨーロッパからアジア、日本まで幅広く伝説が伝わっている。日本での最古の記録は六百十九年とされており、日本書紀にもその記録は残されている。

さて、どうして僕がこういう話をしているかというところ。

「少年、どうした。気分が悪いのか？」

「……なんで僕がこんな場所に来ることになったのか、その理由だけでも教えてもらえればせめてまだいいんですがね」

東京都のある通りを入った路地の奥に雑居ビルがある。その一階にその部屋はあった。

「柘木伝承相談所」という古いテナントへ夏乃さんに呼ばれたときは流石に嘘かと思った。僕は『妖怪大辞典』を読みながら、話を続ける。

「人魚、つて言いましたよね。さっき」

「ああ」

夏乃さんが僕を呼んだのは、それについてだった。

人魚。

よくアニメーションでは神秘的な存在として扱われることが多いけれど、人魚には様々な伝承がある。

曰く、人魚の肉を食べれば不老不死になる。

曰く、人魚は地震や津波といった天変地異を予知することができる。

……あげてもキリがない。ともかくそれくらい人魚というのは噂が多い生き物なのだ。

「……その人魚が住むという村があるらしくてな。私に依頼を頼んできたわけだ」

「依頼、ですか」

「そう。依頼だ」

「毎回思うんですけど、その依頼ってどこからやってくるんですか？こんな古いテナントまでわざわざ人がやってくるんですか？」

「案内やってくるものだぞ。伝承とか因習、妖怪やカミサマってものは警察などの権力には囚われないからな。となると、『そういう類』を知っている人間に対処を依頼するしかない……ってわけだ」

「同業者とか居ないんだろうか、というツツコミは野暮なのでやめておいた。」

「……まあ、いいや。とりあえず話を聞かせてくださいよ。そうでないとどうして僕がここに来たのか、意味がまったく掴めない」

「まあ、それは簡単に説明しよう。……この前、

メールが来た。私に対して、だ。その要件は『人魚の存在を調べて欲しい』ということが書かれていた」

「人魚が住む村の調査ではなくて、『人魚そのもの』に対する依頼ってことですか」

「まあそういうことになるな。人魚という存在が、どういう風にあるのか私も気になるものだ」  
夏乃さんの背後には大きな本棚がある。その本棚には様々な本が入っている。そこには妖怪やカミサマに関する本が多数置かれている。そういうものを専門に扱うから当然のことだとも言えるけれど、そこまで必要なのだろうか？

「そうだ、思い出した。少年、ちゃんと買ってきてくれたか？」

夏乃さんは思い出したように僕に言った。

ええ、きちんと忘れていませんよ。

僕はそう言っただけを差し出す。

「これだこれだ。さすがだな」

そう言つて夏乃さんは袋から箱を取り出し、その箱を躊躇なく開けた。

その中にはロールケーキが入っていた。

ゆるふわロールケーキ。

江ノ島に本店を構える老舗和菓子屋の商品である。これを求めて全国から甘いもの好きが訪れる。かつて夏乃さんは僕の学校に訪れたとき、それを出したのだが、それからこのロールケーキの虜になった……というわけだ。

ロールケーキを一口頬張つて、夏乃さんは紙パックのミルクティーを一口啜る。僕もそれが食べたいと唾を飲んだが、生憎一人分しか用意出来なかつたため仕方ない。これから帰つたら自分用に買って食べることしよう。

「さて」

完食し、皿とスプーン（生クリームが非常に多いため、またフルーツがふんだんに含まれているため、ゆるふわロールケーキはフォークで

はなくスプーンで食べる）を洗つて夏乃さんは僕の肩を叩く。

「行くぞ、少年」

「だから」

——いつになつたらまた夏乃さんは僕の名前を呼ぶのだろうか。

「僕の名前は日下洋平ですよ、いい加減に覚えてください」

そして、僕と夏乃さんの『調査』が始まるのだった。

## 2

夏乃さんに届いたメール曰く、その村は東北地方のとある農村だという。電車もろくに走っておらず、そこまで行くのに五時間余りを要した。『このさき洲崎村』と書かれた看板を見るこゝとができて、漸く僕はほっとしたくらいである。

道中、タクシーの運転手さんに「洲崎村に行くのか？ やめといたほうがいいと思うがね。あそこは『食人文化』が根付いている、つて噂だ。よそ者が入ったら食われかねん」なんて言っていたのを思い出す。

食人文化。またの名をカニバリズムという。食人文化には自らの仲間を食べる族内食人と自らの敵を食べる族外食人の二種類がある。前者ならば死者の愛着から魂を受け継ぐという儀式的意味合いを持つが、後者ならば復讐等憎悪の感情が込められているという。

また、死者の恥肉が強壯剤及び媚薬になるという考えも世界中に見られており、おもに粉末化されたものが薬として飲用される。

これらのことは別にヨーロッパやアジアに限った話ではない。日本でも古くから食人文化というものはある。古事記にもそう記されている。

一番古いエピソードは綏靖天皇が七人の人間を食べたという故事が『神道集』に所収されて以来、説話にはカニバリズムが散見される。遠野町で五月五日に薄餅を食べるのはかつてカニバリズムがあった名残であるとも指摘されているし、戦国時代には羽柴秀吉が兵糧攻めした際、相手の城の兵士は死んでしまった兵士の肉を食い争ったというエピソードもあるほどだ。

「雲行きが怪しくなってきたね……」

夏乃さんが呟いたのを聞いて、僕も空を見上げる。本当だ。いつ雨が降ってもおかしくないくらい、雲がどんよりとしている。

「……急ぎましょう」

僕が言うと、夏乃さんも頷いてそれに続いた。



洲崎村にはホテルも宿屋も存在しない。

その為どこに泊まるか悩んでおり、野宿しなくてはならないか……とまで言われていたが、運が良いことに優しいおばあさんが寢床を貸してもらえると。願ったり叶ったりだと思つたのか夏乃さんは即座にそれをしてもらうこととした。

その夜。

僕たちはおばあさんと一緒に囲炉裏の周りに座つていた。囲炉裏にはぐつぐつと煮えた鍋が置かれている。鍋の中はきりたんぽが入っていた。それに山菜、キノコ、少しのお肉。まるでこの家にあつたとは思えないものばかりだ。「今日はお客さんがいるからねえ……。奮発しちゃつたよ」

おばあさんはそう言いながら木のへらで鍋をかき混ぜる。それを一回する毎に味噌の香りが部屋の中に充満していく。思わずよたれを零してしまふほどだ。

煮上がったのを確認出来たのか、おばあさんは器を取り出しそれぞれ一人分ずつ分け始めた。僕はそれをもらつてすぐ食べたかったが、おばあさんがおわるまで待つのが礼儀つてものだ。

おばあさんがよそい終わり、手を合口させる。「いただきます」

こうして、僕たちの食事が始まるわけだ。

箸を持ち、野菜を口に頬張る。味噌の味が深く染み込んでいて、とても美味しい。

夏乃さんの方を見ると猫舌らしく、はふはふと言つていた。それが少しギャップを感じたというかなんというか。まあ、夏乃さんはあんなクールな格好をしている割には甘いものが好きだったりするし、クールなのはキャラ作りなのかな？

「……どうした少年。私は別にキャラ作りでこういうことをしているのではないぞ。まったくの勘違いだ」



「勘違い、って」

僕は笑う。それにつられておばあさんも笑った。

そうして僕たちの食事は、あつという間に終わってしまった。



食事をご馳走になったのだからせめて片付けくらい、と言った僕と夏乃さんの言葉を、客人にそんなことさせるわけにはいかないといって振り切ったおばあさんが片付けを済ませ漸く座った時には、時刻は九時を回っていた。

「おばあさん、少し聞きたいことがあるんだが……いいか?」

夏乃さんの言葉に、おばあさんは首を傾げた。

「なんだい?」

「この村に人魚の噂があると聞いてやってきた

んだが……少しばかり教えてもらうことはできないか?」

「人魚、ね。人魚なんてものがいれば、私は今頃ぶりていーがーるじゃろうて」

そういつておばあさんは笑った。

確かにそのとおりだ。もし人魚の肉が、本当に不老不死——或いは若返りの作用があるのだというのなら、とつくにおばあさんは食べているかもしれない。

或いは村の一部の人間が人魚の肉を食べている可能性もある。

そもそもどうして人魚の肉を食べている前提なのかは、まあ、不老不死つものに人間の大半は懂れるから……という僕の勝手な予想だ。……夏乃さん、人魚の件、どうするつもりなんでしょうか?」

「わからん。ともかく、明日以降調査してみるしかあるまい。話はそれからだ」

まあ、そう答えるのは半分承知していたけれど、実際にそう聞かれるとなんかむなし。何か考えているものだと、僕の脳内の夏乃さんは訴えていたから猶更。

「ん、どうした少年？ 熱中症にはまだ時期が早いぞ？」

「別にぼうつとしてしているイコール熱中症では無いです。まあ、いいです。

別に関係ないですよ。取り敢えず、明日からまた調査を始めるということですね？」

「また、というか……。まあ、そういうことになるな。取り敢えずまた明日ということにしよう」

「寝るなら奥の部屋を使うといい。既に布団を敷いているからのう」

「そう言っておばあさんはゆっくりと立ち上がる。」

「あれ？ おばあさんは？」

「私はまだやるものが残っているからのう……。ほっほっほ、安心しなさい。ここに獣がやってくることは無いからのう」

「そう言っておばあさんは家の奥へと歩いて行った。」

——部屋の入り口のところで、おばあさんは振り返る。

「そうじゃった。お風呂、沸いておるぞ。一応言っておくが、ちゃんとした風呂じゃよ。ガスじゃ、ガス。近代のやつ……。っていう感じをふるばわーで使っておるぞ」

お風呂！ そう聞いた夏乃さんが思わず飛び上がった。それ程お風呂に入りたかったのだろうか。そういうところを見るとやはり女性である。

「なんか考えているのか？ ん、少年？」

「……もしかして、読めちゃいましたか？」

心を読める能力を持っているとは恐ろしい。もう普通の女性ではないじゃないか……。いや、とつくにそうかもしれないけれど。

「やっぱり言っているな！少年！さすがの少年の考えでもそれは私を侮辱したことに等しいぞ！今日、少年は私の風呂の番をしろ！」

「番、って？」

「不審者が来ないかどうか見張るのだよ。別におばあさんを疑っているわけではないがね」

突然トーンを落として、夏乃さんは言った。でもその話からすれば疑っているも同然じゃないか、とは言わないで置いた。

だってこれ以上面倒なことになるし。

面倒になることは言わないでおくのが吉。

そう僕は覚えている。

パラドックスよ、こんにちは。

仕方ない、と思ったイヴは彼の言うことに従うこととした。

「解った。……共同研究とは言うが、一体何を研究しようというんだ？」

イヴがそう言うと、来喜は近くにあったパイプ椅子に腰掛け、

「脳の電子化さ」

はつきりとそう短く言った。

人間の脳は、この大きさでと言えば、どんなスーパーコンピュータにも勝ることが出来る超スーパーコンピュータ（超とスーパーの意味が重複しているが）といえるだろう。

脳の電子化は、別に来喜が初めて提起した問題ではない。二〇四〇年現在、たくさんの学者

が考えてきていた。様々な理論が展開され、実験が繰り返され、そして失敗していった。

脳の電子化というのは、人間が考えるほど簡単ではない——ということだ。

「脳の電子化だと。笑わせる。そんなものがそう簡単に出来てたまるか。第一、そんなことが出来るのは今からずっとずっと先だと言われているじゃないか。それを一介の学生である私とお前がつくるだとう？」

「いいじゃないか。無茶ができるのも学生の本分だ。大人になって研究者やら会社員やらになつちまえば、失敗は許されないからな。あまり大きな失敗でなければ学校やら教授などのお偉いさんが尻拭いしてくれる学生のうちにそういう無茶をしてしまったほうがいいんだよ。それに『脳の電子化』だなんてちらつかせたらそういう責任者に為りたがる人間ばかりだと思うぜ？ 何しろ、研究報告書にはその先生の名前

が載るんだからな」

「そういうもんかね」

イヴはそう言ってテーブルに置かれているマグカップを手にとった。

「それが普通さ。欲の無過ぎる君が普通から見れば異常だよ」

「異常という定義を為すのは、その人間でも誰でもある一定の『基準』を設けなくてはならない。自分が……『異常』だと認めているのはそう居ないものだよ」

「じゃあ君は？」

「答えるまでもないね」

イヴはコーヒーを飲み干し、それをシンクに置いて、再び椅子に腰掛ける。

「じゃあ、こんな話をしよう」

「なんだ、つまらん話をするのか」

「まだ話していかないのにそいつは困るね……」

パラドックスの話だよ。君も好きなんだろう？

お父さんが『パラドックスの恋文』を研究していたことだし」

「……私は父の研究を、否定した奴らを見返すために研究をしている。だから、お前になんか手伝ってもらっては困るんだ」

「僕が共同研究にあげているテーマが、それをも包含しているとしても、かい」

それを聞いて、イヴの動きが止まる。

来喜はシニカルに微笑み、白衣のポケットから無作為に詰め込んだ一枚のレポート用紙を取り出した。

そこには図が描かれていた。雑な図だったが——大まかではあったものの、それはイヴにも容易に理解できるものだった。

「僕の研究テーマはね、『電脳世界における倫理観の構築とそれによる時間推移』なんだ。倫理……まあ、道徳と言ったほうがいいかもしれないね。社会慣習として成立している行為規範の

ことだよ。道徳はいろんな意味があるんだ。例えば、人間が無意識のうちに世の中に存在するものと認識している正邪・邪悪の規範とかだつたりする。そうだな……君が目の前で百円玉が落ちていたらそれをどうする？」

「交番に届けるのが正解ではあるな」

「そういうこと。だけど人によつては……言い方は宜しくないけれど、貧しい家庭で育つて、小さい時から親に『落ちているものも拾え。そして自分のものにしろ』だなんて言われ続けていれば、その子供はどうすると思つ？」

「交番など行かず、自分のものにするだろうな。それが『悪い』だなんて思いもせず」

「つまりはそういうことさ。道徳とは個人の価値観に依存してしまう。これが『悪い』と皆が思つても、ある人数は『これは悪くない』と倫理観を違反してしまうことが起きてしまうのさ。……まあ、大体多くの場合、個々人の道徳観は

共通性が見られるから、結局はこれについて吟味することはないのだけれどね」

「なんだ。いいかげんにしろ。私だって研究をしなくてはならないんだ」

「そう言つて、イヴは立ち上がるとコーヒーマーカ―のスイツチを入れた。」

「またコーヒ―かい。立派なカフェイン中毒とは言えないか？」

「黙れ。飲まないと落ち着かないんだ」

「それは立派なカフェイン中毒と言えるよ」

「そう言つて来喜は両手を挙げた。」

「つまりね、ひとつの世界を作つちまおうというわけさ」

来喜が仰々しく両手を広げるのを見て、思わずイヴは言葉を失つた。

来喜がいったことはとてつもなく壮大で途方で空虚で必然で切実で厳密に言えば滑稽だった。

世界を作ることが、どれほど難解で壮大で緻

密で綿密で厳密であるかということをおそらくは知っているのだろうが——知らないと思わせるその言動だった。

「勿論世界を作ることが難しいということは解っているさ。だからこそ、それを行ってみようという気持ちが浮かんでこないかい？ それを試してみよう。やってみよう、とね。それをすることで、世界は大きく変わるかもしれないし、もしかしたら変わらないかもしれない。どうなるかも解りはしないが、それでも大いに価値はある。……どうだ、やってみようとは思わないか？」

「断る」

「固いなあ。君の実験もその世界なら普通にできるんだぜ？ 何しろ、データだ。〇と一で表現出来る世界だから、リセットも出来る。実験で悪いデータを得た場合はそれをうまく利用して世界を作り替えてもいい。どうだい。やっ

みようとは思わないか？」

来喜は再度問いかけるが、それでもイウは首を縦には振らなかった。

「いいと思うんだけどね……」

「世界を作るのにどれくらいの時間がかかるっていうのよ。第一、中間発表でいい結果が出せなかったら、その時点で研究は中止になるのよ。それを考えるとリスクが高いったらありやしない」

「リスクを考えるからダメなんだよ。時にはリスクを無視して考えないと、奇抜な発想は生まれないぜ？ 例えば地動説を唱えたコペルニクスだってそうだ。自らの発見によって多大なリスクが生じると考えていたコペルニクスはその書物を自分が死ぬまで発行することを許さなかった。だから、地動説が最終的に評価され、『天文学上最大の再発見』だなんて言われるようになったのもコペルニクスが死んでからの話だ」

「コペルニクスはそれに恐れていたから、なかうか？」

「そうとも言えるし、そうじゃないとも言えるだろう。ただ、今この世界で誰がどうこう言おうと僕たちはその時代を経験したわけではない。死人に口なし、だなんてことわざもあるくらいだからね」

来喜がそう言うくとコーヒーマシンの方に向かって、スイッチを押す。

「……マイカップを持ってきていたのか」

「喉が渴いたらどこでも飲めるだろう？」

「そうか。だったらトイレの水でも飲んでろ」

「強情だなあ、君は」

アハハ、と乾いた笑い声をあげて、再び椅子へ腰掛けた。

「それで、……どうかな？ やろうとは思わない？ きつと、君も興味が湧いてきたはずだと思っただけど」

「興味はある。確かに。仮想世界での実験などそう簡単にできることじゃあない」

「だろう。だったら……」

「条件を一つつけよう。私の実験を行う世界と、君たちが行く共同実験の世界、合計二つを作る。これを約束してくれるならば……協力する」

イヴがそう言うくと、来喜は顔を綻ばせた。よっぽど嬉しかったらしい。立ち上がりコサックダンスをしている。この間カップ内のコーヒーは一切揺れていない。

そして直ぐに「ありがとう！ 詳細は追って連絡するよ！」とだけ言って来喜はイヴの部屋をあとにした。イヴはただそれを見て、何も言わず、鼻で笑っただけだった。



それから、一日の作業は至極スピーディーに



進んだ。

とはいえ、世界を構築するための前段階に過ぎない。世界を構築するために高速フリー交換などを駆使してできる限り擬似的な世界を作り上げる。これは不可能なように見えるが、多少時間と技術とコストがかかる以外は普通に出来てしまうことなのだ。

「……ふむ」

一息ついて、イヴは今日のことを考える。

結局——来喜の提案を受けてしまったこと、だ。

彼の提案はすぐ彼女にとつても有意義なことだった。だが、そう簡単に受けてしまつていいものだったのだろうか？

「……まあ、決めてしまったものはしょうがない」

これで、世界が作れる。

私の世界が、完成する。

それを考えるだけで——彼女の口は緩んでいた。

## 次号予告

XY「奴隸少女の勇者道」パラドックスよ、  
こんにちは。」掲載予定！

第9号 12月5日刊行予定。

・「変身願望」掲載予定 新作短編2号連続試し読み掲載！ 「僕は吸血鬼になれない」

・「odd」5周年プロジェクト進行中！ 第四部

「レヴィナスの聖女」第一話

・「ウオーリアーズ・クロニクル」シリーズ完全新作、*Rising mini* にて連載開始！ 「ウオー

リアーズ・クロニクル」 巫女の歌と始まりの樹」プロローグ

・新連載！ 『ハコニワ』から逃げられない少年少女——！ 「ハコニワ・リローデッド」

・新連載！ 少年少女の不思議な夏休み。「僕と彼女のセカイ——新章・夏休み編——」

ほか、「ほくらはポッキー戦士 第一部完結編」、「黒板厨ゆうなマギカ：結」、「pokemon

新企画！「読み切りフェスティバル2015」  
2016」開幕！

- ① 「男の願いと小悪魔の受難」第9号（12月5日号）に掲載！
- ② 「思い出キヤバクラ」第10号（12月19日号）に掲載！
- ③ 「オレンジスターを追いかけて」第11・第12合併号（1月23日号）掲載！
- ④ 「銀河の宝箱」第13号（2月6日号）掲載！
- ⑤ 「未定」第14号（2月20日号）掲載！
- ⑥ 「未定」第15号（3月5日号）掲載！
- ⑦ 「未定」第16号（3月19日号）掲載！

RISING mini 第8号

発行 2015年11月21日

著者 巫夏希

発行 かわらや出版